

好感度数値が見えるようになった。よく話す彼女達は“13、”だった。泣きたい。

鹿里マリオウ

（因みに最大値が “10” であることに、主人公は気づいていない模様）

目次

変な数字が見えるようになった朝	1
後輩と戯れる朝	17
妹に怒られる昼	33
妹に怒られる昼(裏)	43
後輩が出待ちしてる朝	61
寝たフリしてるだけの朝	81
学校でも妹に怒られた昼	95
文化祭準備で嵌められた夕方	107
学校でも妹に怒られた昼(裏)	123
文化祭で裏方してる昼	135

変な数字が見えるようになった朝

大学呪験という呪いの装備に取り憑かれて長らく放置していたので書き直しました。

身体が熱い。

体の芯から、手足の爪先まで、血液が沸騰しているかのように熱が疼く。

だが、目の前は暗く、全く状況が分からない。平衡感覚すらおかしくなっていて、自分が立っているのか横になっているのか。宇宙に投げ捨てられたら、こんな感じだろうか。

とにかく熱くて、訳も分からず手を伸ばす。

「——ッ!!」

救いを求めて飛び出した手は、僕に被っていた布団を弾き飛ばした。

「…………え　？」

ベッドの上であつた。

「夢？」

現在の状況を鑑^{かん}みるに、先程の灼熱体験は夢の出来事だったらしい。しかし、まだ身体を焼く熱さの残滓は体にこびりついている。

汗で張り付く寝巻きがこれまた鬱陶しさを際立たせていた。

…………最悪の寢覚め。これが、僕の「異常な日常」の幕開けだった。



「水、飲みたい…………」

過去一気分の悪い夢のせいで、最悪の朝になってしまった。

とにかく何でもいいから気分をリセットしたい。と、項垂れながら自室のドアを捻る。

押し寄せる廊下の冷たい空気が心地よい。

「――朝から情けない顔ですね、兄さん。癩に障ります」

「――ッ！！？」

誰もいないとタカをくくって廊下で深呼吸を繰り返していたが、なんか目の前に妹がいた。いつも通りの羽虫を見るような冷たい視線。

やばいのあきは
矢羽猪秋葉。僕、やばいのすぐる矢羽猪直来の妹。

鋭い目つきが特徴の秋葉だが、いかんせん他のパーツも整いすぎているので、むしろ厳しい視線もクールビューティーを彩る一因としてプラスに働いていた。

烏の濡れ羽色のロングヘアは淀みなく、スレンダーな身体と完璧なマツチングを魅せる。

学校でも注目の的。毎日のように告白されているのを目にする。

目付きが悪いだけの僕と大違いだ。

しかしこの妹、僕への態度が人に対するそれじゃない。秋葉の目には僕がハエに写っているのかもしれない。

最悪の朝がもっと最悪の朝になってしまった。秋葉のことが嫌いな訳では無い。ただ苦手だ。いや、怖いと言った方が正しいのか。特にその睨み。現在進行形のその睨み。こわい。

……あれ？

「……なんですか、じっと見つめて。まさか実の妹である私に欲情して視姦しているのですか。いよいよもって終わってますね。私以外の女性にやったら即刑務所行きですよ」

「まじで僕の事なんだと思ってんの？」

朝イチに妹から性犯罪者のレッテルを貼られた。なんで朝からこんなに詰^なじられてるんだろう……。

「実の妹を性的に捉える変態だと思っっていますが、違うのですか？」

「違うから。そこまで落ちてないから。秋葉の頭に乗ってる数字が気になったただけだから」

そう、この妹、何を思ったのか頭の上に“15”という数字を浮かばせているのだ。最新のファッションだろうか。今の若い子が心配になる。

「数字？なんのことです？とうとう脳みそまで不良品になってしまいましたか？」
「いや、頭の上に浮かんでるピンクのやつだよ。」15「ってのが浮いてんじゃん」
「はあ？兄さんのお巫山戯に付き合っている暇はありません。これ以上兄さんの近くににいることに耐えられそうもないので、私は先に学校に向かいますね。兄さんも遅刻はしないで下さい。私の評価にまで関わりますので」

ため息混じりに踵を返す秋葉。結局明確な答えは返ってこなかった。いったいあの数字は何なんだ。アレつけたまま学校行くのか。それでいいのか優等生。

階段を降りて玄関へと向かう後ろ姿を、ドン引きしながら見送った。

そういえば、何故秋葉は僕の部屋の前で立っていたのだろうか。



……クラス全員つけてる。

……登校したら、クラスの皆の頭上に、ぷかぷか数字が浮いていた。逆に数字がないのは僕一人だけで、何故か恥ずかしい。

登校中は殆どの人間に数字はなかったのだ。

クラスの中だけで流行っているのかもしれない。でも秋葉がつけている理由は謎だな。

数字の数は概ね4か5あたり。

しかし、誰一人として自分の頭の上の異物について触れない。どころか視線も意識すら向けないのだ。

これはおかしい。最新の流行、しかもクラス中で流行りまくるほどの物だとしたら、今はこの浮く数字の話題で持ち切りになっている筈だ。何かがおかしい。まるで誰も、数字が見えていないかのように生活している。

もしかして僕だけに見えているとか？

思い出すのは、今朝の悪夢。

あの灼熱によって僕の脳みそは、本当に不良品になってしまった、などと最悪の想像をしてしまう。

そして、その想像が真実であるという確信を得たのは、すぐ後のホームルーム

だった。

中年の先生が入ってくる。その頭にも、5の数字。

平然と本日の伝達事項を伝えていく。

彼は巫山戯るような教師ではない。そんな教師がこの異常ファッションを注意しないわけがないし、まして自分も参加するなど有り得ない。

確信。

僕の脳みそは、不良品になった。

一瞬ドッキリの可能性を疑ったが、それもない。なぜなら僕ボッチだから……

ホームルームが終わり、急いで携帯で検索をかける。

頭上、数字、病氣——検索。

ろくな情報が出てこない。ヒットしたのは大量の創作物ばかり。所謂好感度パラメータなるもの関連の漫画やら小説やら。

……いや、流石にないよな。

一瞬本当に好感度パラメータなのではと馬鹿な勘ぐりをしてしまったが、そんな

はずもない。

放課後病院に行くことを決意して、一限目の用意をする。——だがその頭の中には、依然として先程の好感度パラメータという言葉がこびりついたままだ。

自分で言うのもなんだが、僕は全くこのクラスに馴染めていない。コミュニケーションというのが大の苦手なのだ。たった一言の発言であっても、いちいち相手の受け取り方を気にしてしまう。

休み時間を寝たフリでやり過ぐすなどざらなことだ。

そんな僕にとって、相手の気持ちを一目で知れるというのは、非常に魅力的な話である。

もしも、もしもこれが本当に好感度を示しているなら、僕にとってこんなに嬉しいことは無い。

有り得ないとは理解しながらも、つい妄想を広げてしまう。

好感度パラメータ説を考えると、登校中のほとんどの人に数字が現れなかったのも説明できるのではなからうか。全くもって見ず知らずの人間に対して、好感度というものが存在するはずもない。だから好感度を示す数値そのものが出ていなかった

たのだ。

無根拠の妄想でも、なんだか謎解きに正解したようでテンションが上がる。

フフ、そうすると十段階評価で好感度を示しているっぽい。皆の僕への印象は良くも悪くも普通だな。秋葉は……あ。

そこで、先程までに高まっていたテンションが一気にしおれた。そう、秋葉の数字は15。つまり数字の上限は10に留まらない。それも僕をかなり煙たがってる秋葉が好感度15なら、その上限は50以上が妥当、場合によっては100までなんてもともあるかもしれない。

……ど、どうやらこれは好感度パラメータではなかったようだ。クラスの皆からの好感度が秋葉より低いなんてことある筈が無いしな。……ないよね？

「大丈夫？ スグクル君。顔色悪いよ？」

「——あ、う、うん」

一人顔を青くしてると、すぐ隣の席から声をかけられた。不意のことだったので

軽く詰まった返事になってしまった。ちなみに不意じゃなくてもよく詰まる。

「具合悪いなら保健室行く？ 私でよければ連れてくよ？」

広角こうど春香。クラスのマドンナ。というか学校のマドンナ。

茶髪気味のボブカットとパツチリとした瞳は元気を振りまいている。そして胸が大きい。

誰にでも、それこそこんな僕にでも優しい人格者でもある。

「あ、ありがとう広角さん。でも大丈夫だよ」

「そう？ 無理しないでね？——あ、それと広角なんて他人行儀な呼び方じゃなくて春香って呼んでくれると嬉しいな！」

名前呼び。広角さんがいつも僕に要求してくるものだが、僕にはハードルが高すぎる。

「う、うん。努力はしてみ——っ」

そこで気づく、広角さんの頭上。そこには、“13”の文字が堂々と居座っていた。いまさっき否定した好感度パラメータという妄想が再び去来して、一瞬息が詰まる。そんなわけが無いと自分に言い聞かせるも、やはり完全に振り払うことはでき

ないようで、体が強ばったまま数秒が流れる。

「うゝん、やっぱり体調悪そうだよ？一緒に保健室行った方がいいんじゃないかな？」

その硬直を勘違いした広角さんが顔を覗き込んできた。優しさに溢れる行動に感謝と尊敬の念が湧くが、やはり恥ずかしさやら気まずさやらが勝り、さらには13の恐怖も加わって、まともに目を合わせられない。

「うん、顔も赤いし絶対行った方がいいよね。そうだよね」

「い、いや、本当に大丈夫だから」

「ううん、だめだよ。一緒に行こう？」

僕の意見が一瞬で無視されました。何故だか広角さんの当たりがやけに強い気がする。やはり嫌われているのだろうか。

「大丈夫、心配しないで。何もしないよ」

心配そうに距離を詰めてくる。……いや、これは心配そうな顔とはだい

ぶ違う気がする。と言うよりむしろ、捕食者のような雰囲気醸し出してにじり寄って来ていた。

パッチリとした双眸は獲物を捕捉した獣の如く瞳孔を開き、暗く濁って光を失っている。

本能が警報を鳴らす。が、体は指の一本も動かない。目も逸らせなかった。普段なら目と目を合わせるなんてできないのに。蛇に睨まれた蛙という言葉どおりの状況である。

「保健室に行くだけ。行くだけだから」

固まる僕とは反対に、依然広角さんは近づいてくる。最早、鼻先が触れそうな程至近距離だ。

「一緒に……ね　　？」

「は、はひ」

異常事態と被捕食者の恐怖に思考は停止し、逆らうなという本能の悲鳴に任せることしかできなかった。

——その時である。僕が間近に迫る広角さんに震えているその横で、複数名の数字が突然変わった。

5か4を持った幾人かの数字が、一つ下がって3も見られるようになった。

急なことで呆然とする。広角さんの存在も一時頭から離れ、クラスを見回した。そして気づく。数字が下がった人たちは、全員男子だった。

心臓が跳ねる。クラス一のコミュ障野郎がクラス一の美少女に詰め寄られている場面を見れば、男なら嫉妬してしまうだろう。まさにそのタイミングで数字は下がった。

——まさか、本当に……？

「——ねえ」

再度、心臓が跳ねる。それもさっきよりも遥かに大きく跳ねた。

「なんで？なんで今私から目を離しちゃったの？」

寒気すら感じるオーラを、目の前の淀んだ瞳は放っていた。

「教室に気になるヒトでもいるの？」

なんなんだこのプレッシャーは。怒っているのか？何故？

「い、いや、別にいないよ」

「本当？嫌いなヒトとかもない？いたらちゃんと言うんだよ？」

「大丈夫、いないって」

仮にいたとしてもここで言ったら明日から虐められるだろ。……まさか

それが狙いなのか!?

「そっか!なら安心!それじゃあ、保健室に出発進行だよ!」

広角さんがハツラツと笑いながら僕の手を引いていく。その笑顔が本当の笑顔なのか、分らない。だが、ここで広角さんに逆らうのは得策ではないだろう。

先の広角さんは、普通ではないオーラを放っていた。とにかく下手に反感を買う行動だけは気をつけなければ……。

本来ならば飛び跳ねて喜ぶはずの、美少女に手を引かれるというシチュエーションに、僕は何故か恐怖感のみを抱いて、無抵抗に保健室へと連れていかれるのであった。

——てかなんで恋人繋ぎなんだ……。怖くて聞けないけど。

プロットの
20話前後で
終わります。

後輩と戯れる朝

保健室でベッドに寝転んでいる。

保健室の先生も席を外しており、ただ僕が独りぼけーッと静けさを感じるだけの時間。

他の生徒達は授業中。しかし、だからといって背徳的な高揚感が来るわけでもない。そんな気分にはどうしてもなれない。

言ってしまうえば、僕は放心状態であった。

原因は間違いない、広角さんさえ含むクラス全員に嫌われている可能性があるということだ。

もちろんこれは、皆の頭上に現れる数字が好感度パラメータであるなんていう無根拠の妄想を基盤とした話なのであって、信憑性は著しく低い。僕のバグった頭が、全く意味の無い数字を無作為に割り当てている説の方が、可能性としては遥かに高い。

しかし何故だろう。好感度パラメータという言葉が脳内から離れないのだ。

せめて広角さんは普通くらいあって欲しかった。今まで向けてきた笑顔は仮初だったのか、と勘ぐってしまう。

これからの学校生活が不安だ。念の為、休み時間には寝たフリで外界との関係を遮断しよう。弁当は一人で黙々と食べよう。放課後は直ぐに帰ろう。……いつもの僕だ。

ま、まあとりあえず、当面広角さんには近づかない方がいい。

あの笑顔の下で何を考えてるのか分からないうえ、クラスの反感を買うリスクもある。

さつき授業のチャイムがなった時も謎にごねてきたしな。私も一緒にサボりますとか、保健室でもできる授業があるからとか、優しくするよとか。

完全に肉食動物の目だった。怖かった。

「はあ、僕は最早誰を信じれば……」

溜め息が虚しく空気に溶ける。水を張ったような静けさが再び落ちる……

・かとも思ったのだが、

「ナオキ先ばあああああああい！！！！」

保健室のドアが壊れんばかりの勢いで開かれた。

そして人間離れした速度で僕の懷にダイブをかます女子生徒。

「ナオキ先輩、ナオキ先輩ナオキ先輩ナオキ先輩ナオキ先輩ああああい!!」

左右に跳ねた犬耳のような二束の髪を振り回して、その女は僕の腹に頬ずりしてくる。

「ナオキ先輩大丈夫っすか!? 何処か具合悪いっすか!? それともさぼりっすか!?」
グイグイと顔を近づけて、彼女は心配そうに眉をひそめている。

可愛い八重歯がチャームポイント。妹や広角さんにも引けを取らない犬っ子美少女である。

名前は**辺和夏海**。へんなつみ僕が妹以外で交流のある唯一の後輩である。

「スグクルね、ナオキじゃなくて」

「了解っす! ナオキ先輩!」

.....

僕の名前の直来だが、すぐくるご覧の通りナオキと間違えやすいのだ。

そして夏海は毎回間違える。何度注意しても訂正しないところを見ると、わざと

やっているのだろう。仲のいい人らのお決まりの掛け合いみたいなもの。

まあ、この子も“13”なんですけどね……。

夏海の頭上にはこちらを嘲笑っているのかとすら感じられる“13”の文字。

さて、今イチオシの好感度パラメータ説をとると、今の状況はともまずい。

なぜならこの子、ここら辺じゃ知らぬ者はいないクレイジーな不良なのだ。

不良集団四十人を一人でのしたという伝説すら持っている。……という

か、その現場に僕もいた。もっと言えば、その惨事の原因は僕だった。

経緯を説明すると、僕が不良に絡まれた。夏海が来た。ボコボコにした。以上となる。

最初は数人だった不良も、夏海の圧倒的暴力を目の当たりにして、増援に次ぐ増援。最後は四十人という大勢力に膨れ上がった——ものの、結局全員地面に臥す結果となったのだ。

頬を興奮に染めながら敵を屠っていく光景は今でもトラウマで、辺和夏海への消

えない恐怖心を植え付けている。

そんな辺和夏海の好感度が、“13”。

恐怖である。

この人懐っこく頬ずりしてくる笑顔の下には、どんな悪魔が潜んでいるのだ。僕を油断させる笑顔。敵意など感じられない。しかし嫌われているかもしれないと考えると、脳裏にあの時の光景が蘇り、途端に寒気が腹の底から湧いてくる。

「ナオキ先輩？」

「ひいっ!？」

表面に出さないようにしていた感情の機微も、彼女には容易く見破られた。

「どうしたんすかナオキ先輩、今日なんか変っすよ？」

夏海が自分の顔を僕の顔へと突き合わせてくる。

かわいい。など場違いなことを思ったのも一瞬、いや二瞬。……三瞬。

夏海に詰め寄られた恐怖に身を固める。

「ま、待て！ステイ！夏海ステイ！」

可愛さ、恥ずかしさ、気まずさ、怖さ、色々なものがごちゃ混ぜになり、かなり

気が動転していた。

突いて出た言葉は、彼女のような強者へ口にするには不遜過ぎるものだった。

夏海の不良としてのプライドに触れた――

「なんすか!? 犬ごっこすか!? わんわん!」

わけでもなくとても乗り気に返してきた。

「わんわん! ナオキ先ば〜い! わふわふ〜」

いやめっちゃ乗り気だな。

予想外が過ぎる夏海の反応に当惑していると、目の前で驚くべきことが起きた。

“13” ↓ “14”

……上がった。

数字が上がった。13から14に。このタイミングで。

クラスでは、広角さんに詰め寄られた時に男子たちの数字が下がった。

ここでは、夏海と遊んでいる時に彼女の数字が上がった。

嫉妬されて下がった。仲良くして上がった。

嫌われて下がった。好かれて上がった。

妄想が、現実味を帯びる。

この数字は、好感度を表しているのだ、と。

もちろんまだ疑念は残っている。しかし、それでも今は、不思議とこの数字を好感度パラメータと信じる自分が強い。

最高は妹の秋葉で “15”。

あそこまで僕を嫌っている秋葉が最高という事実が大いにショックを受けるが、とりあえず置いておこう。

上限はやはり “50” あたりだろうか。秋葉からの嫌われ具合を考慮すると、“15” が半分にほど近くなる “40” でも足りない気がする。だから “50” 。それ以上という可能性は考えたくもない……。

しかし僕は、自分が思っていた以上に嫌われてるのか。

だが、ここで知れたことは大きい。もし知らぬまま生活していたら、いつか大変な事になっていたのではなからうか。

ここからである。ここから、この好感度が見えるというアドバンテージを活かして、なんとか安全な高校生活を実現するのだ。

脱ぼっちを全力で目指す。そうと決まれば先ずは、比較的好感度の高い秋葉、広角さん、そして目の前の夏海的好感度を、半分の“25”まで引き上げることがひとまずの目標としよう。

「ううう♡やばいっす♡ナオキ先輩の匂いすごすぎて♡♡こんな中毒になっちゃうっす♡♡」

……これはいい匂いって褒められてるのだろうか、それとも臭いと馬鹿にされているのだろうか。

好感度は下がっていない……ということは臭くはないのだろうか。

さて、好感度を上げるために、現状を再確認しておこう。

まず、僕と夏海は今保健室のベッドで“犬ごっこ”なるものをしている。その内容は、夏海が犬の真似をするといったシンプルなもの。

じゃれつく犬のように僕の胸に頬擦りを繰り返してくる。好感度が見えなければイタい勘違いをしていただろう。

しかし今の僕には分かる。夏海が好きなのは“僕”ではなく“犬ごっこ”なのだ。僕のことはいいのいい道具ぐらいにしか思っていない。自分の趣味、悦楽を満たす

のに利用できそうだったから利用した。そういう点ではパシリとたいして変わらな
い。

だがこの“犬ごっこ”の遊びに付き合ひ、夏海を満足させ続けることができれば、
やがて“凡百のパシリ”から“エリートパシリ”になれる日が来るかもしれない。
今夏海が僕にして欲しいことは……、

「よ、よしよし。いいいいこ」

そう、ご主人役だ。これこそ夏海が求めた正解のはず。その役割を全うすべく、
僕は恐る恐る、それはもう恐る恐る夏海の頭を撫で始めた。

「はぐっ♡や、やばいっす♡♡それやばいっす♡♡うあ♡や、やめてえ♡戻れなく
なっちゃうっすからあ♡♡」

「あ、ご、ごめん」

制止の言葉に夏海の頭から手を退ける。

頭を撫でるといふ行為はまずかったか？背中が冷や汗で湿る。

「あ……あうう♡あうう♡……ううう♡や、やっぱりやめないで
くだひゃい♡♡もっといっぱいなでなでしてくださいっすうう♡♡」

ど、どっち!?

撫でられるのが嫌いなのか好きなのか。だが、

好感度をあげるためにも夏海に逆らうことはしない方が良い。僕は言われるがまま再び撫で始めた。

「あ、ああああ♡♡こ、これ♡これ知っちゃったらもうムリっす♡♡んあっ♡なでなでされてないとすごい寂しくなっちゃっす♡♡死んじゃうかと思ったっす♡♡」

こ、これはごっこ遊びの一部なのだろうか。ロールプレイングとは思えないほどの気迫が伝わってくる。夏海は演技派だったのか。

「はうう♡♡もう戻れなくなっちゃったあ♡完全に壊れちゃったっすう♡…」

：飼って♡♡先輩なしじゃ生きていけないからっ♡♡飼ってくださいっす♡♡」
やばい。夏海のとんでもない性癖が顕になってしまっている気がする。やばい。

「お金も♡払う♡——っすからあ♡♡首輪つけて♡わたしの全部、先輩のモノにして欲しいっす♡♡支配して欲しいっす♡♡」

ここは沈黙だ。下手に何か言うとは後戻りできなくなる。黙って頭を撫で続けるの

が吉。

「あぎゅっ♡あっ♡♡まって♡急にっ♡激しっ♡♡あっ♡ああああ♡♡♡」

夏海が一際強く叫んだかと思うと、そのまま僕の胸に顔を埋め脱力してしまった。

「な、夏海？ 夏海さん？」

「……………う、ああ♡……………あう♡……………」

押し付けられた顔の底から、意味をなさない声が漏れ出ている。

……………そつと体を揺すってみる。

「——あっ♡♡……………あう♡あう♡♡」

僕の手と夏海の肩が触れ合った瞬間に、その身体は大きく跳ねた。しかし依然として言葉はない。本当にどういう状況なのだこれは。

夏海が発する鳴き声は、甘えた調子が伝わってくる。「何か」を求めている声だ。その「何か」とは、おそらく撫でること。

しかし、と僕は時計を見る。時刻は一限目が終わる数分前を指していた。

このベッドで男女が重なり合っているという状況を誰かに見られたとしよう。そんなことになれば忽ちその人の好感度は底を突くだろう。

ゆっくり夏海を退かす。相変わらず鳴き声を微かに響かせる以外には特に抵抗もなく退かせられた。

服装を整えていると、ベッドから視線を感じる。

チラ見すると、夏海が潤んだ瞳を向けてきている——気がした。そんなに真っ直ぐに見つめられても、僕は気まずさのあまり目を逸らすことしかできない。だから今夏海の顔を見たのも一瞬である。やけに蕩けたように見えた表情も見間違いかもしれない。今回の遊びに夏海が満足いったかは結局のところ僕には分からないのだ。

急に不安になってきた僕は、ぎこちない動きで一人横になる夏海に掛け布団をかけて、そそくさと保健室を後にした。

「——あうう♡優しい先輩♡♡大好きっすう♡♡」

“14” ↓ “15”

僕が保健室のドアを閉じる瞬間、数字が上がった光景を僅かに捉える。どうやら満足してくれたようだ。

喜びを噛み締める僕は、しかし夏海の声までは捉えることができなかった。その直線的な好意が籠った眩きに気づけていれば、僕のこの先の非日常は大きく変わっていたかもしれないというのに――。

僕はその後教室に戻り、自分の荷物をまとめて職員室に行った。幸い僕のクラスの一限目は移動教室だった為、特に誰かと会うことも無く、スムーズに先生に早退を取り付けることができた。

よし、早速近くの診療所へ行こう。



「スグクル君お見舞いに来たよ!!」

授業の終了をチャイムが告げたおよそ三秒後、広角春香は保健室のドアを破壊も辞さない心持ちで開放する。

――が、そこに目的の人である矢羽猪直来はいない。代わりに可愛らしい後輩が

ベッドに顔を埋めて悶えていた。

「あうう♡あうう♡ナオキ先輩♡♡アタシ、犬っす♡♡ナオキ先輩の忠犬っす♡
♡飼ってください♡♡躑てください♡♡」

「——は？」

知らないメスがいる。スグクル君はいない。私がいけない間にスグクル君に擦り寄っていた。私の、スグクル君に。コイツが？

「…………おい」

「次会った時も、いっぱい頭撫でて欲しいっす♡♡そ、それから、お散歩もしたいっす♡♡首輪引かれて、ナオキ先輩のペットだって脳髓まで刻まれたいっす♡♡♡♡」
「おいっ!!」

普段の広角春香を知るものなら、間違いなく耳を疑い現実を疑うであろうどす黒い声音が張り裂けた。

「…………チッ、うっさいなあ。今忙しいんだよ。消えろ」

「あなた、一年生の辺和夏海だよ？ いつもスグクル君の周りをウロチョロしてる。あのさ、突然で悪いんだけど、今後一切スグクル君に近づかないで貰えるかな。

あなたみたいなのがスグル君の隣にいと彼が汚れちゃうの」

「あ?……ああ、お前いつもナオキ先輩のそばをウロチョロしてる奴か。」

はあ。お前こそ男子共に股開いてろよ、ちやほやされたいんだろ」

不良と人気者。対極に位置する二人が、真っ黒な殺気をぶつけ合う。全ては、愛しい人の隣を勝ち取るために。

矢羽猪直来の預かり知らぬところで、彼を巡る怪獣対戦が行われているのだった。

人は自分が最初に信じたことを絶対に正しいと思い込む傾向を持つ（246 課題より）。

妹に怒られる昼

学校を早退して診療所へ向かう。最近お世話になっている所だ。こぢんまりとしていて相変わらず受診者はいない。

若いお姉さんの先生との問診の後、謎の機械で検査をすることになった。何故そんな高性能マシンがあるのかとも思ったが、そういうば設備だけは良かったことを思い出す。

数十分の検査。結果は、全くもっての異常なし、と淡泊な口調で先生に告げられた。ひとまず、僕の頭がおかしくなった訳では無いらしい。だいぶほっとしながら家に帰った。

ちなみにお姉さん先生の好感度は無かった。つまり、無関心。普通に泣きそうだった……。



家、ソファに沈んでため息を吐く。頭を巡るのはやはり好感度のこと。一度冷静になると、どっしりと悲しみがのしかかる。皆僕のことを嫌いだった。

僕が何をしたのか。いや、何もしなかったから嫌われたのだろう。話しかけられても返せない。行事でもうまく協力できない。

だが急にコミュニケーションを脱するなど無理だ。くそう。

曇った心を少しでも紛らわす為に冷蔵庫からコーラをとる。

喉に流し込むと、炭酸の爽快感が陰鬱な思考を少しだけ払ってくれた。

だらけた頭で、人と仲良くなる方法に思考をめぐらせているその時、玄関から鍵を開ける音が響いた。

時計を見る。時刻は十二時。学校では4限目に差し掛かっている頃だろう。

おかしい、この家は僕と秋葉の二人暮らし。家の鍵をあけられるものは、僕他には秋葉しかないはずである。

足音が近づいてくる。テンポが速い。急いでいるのか。

……案の定、現れたのはとんでもない剣呑を纏った秋葉であった。

「お、おかえり、秋葉」

何故ここにいるのかという混乱と、纏う冷氣への恐怖、そしてサボりがバレた気まずさから、変にどもった声になった。

「兄さん、早退したと聞きましたか？」

僕の言葉など無視し詰め寄ってくる秋葉。相変わらず “15” の数字。

「理由を説明して下さい」

「……体調が悪くてさ」

「へえ、体調が悪い人がコーラなんて飲むんですね」

秋葉が一步進む。僕が一步下がる。それを繰り返す。

「いや、目がちよつと変だったんだ」

「どんな風に？」

とん、と背中に硬い感触。壁だ。完全に追い詰められてしまった。

「えっと、そのだな……」

言えない。他人の好感度が見えるようになったなんて言えない。そんなこと言うものなら、変人認定からの好感度ダウンのコンボが決まる。

口をモゴモゴさせることしかできずにいたその時、顔の真横で爆音が響いた。

「ッ!!!?」

突然の事で声も出なかったが、心臓はめっちゃ縮んだ。

僕の顔の前には、怒気を滲ませた絶対零度の視線。横には、壁を凹ませんばかりに打ち付けられた手のひら。

そう、壁ドンだった。いや、壁ドン超えて壁ドギャンだった。

「兄さん、今日起こったことを、詳細に、正確に、入念に教えてください」

ゆっくりはつきりと、脳に刷り込むように秋葉は語る。

「誰と喋ったか、誰と触れ合ったか、誰と視線を交わしたか、そして何故早退したか、早退した後は何をしたかまで、全部言ってください」

出た、秋葉の身の程チェック。この妹は、定期的にこうして僕の学校での行動を尋ねてくる。誰かに不快な思いをさせたり、見苦しい行動をしたりしていないか確認するためだ。

「どうして黙っているんですか？何か私に言えない——は？」

急に秋葉の動きが止まる。どうしたんだ？

暫くそのまま固まっていると、次は眉をひそめ始めた。隠そうともせず顔いっぱい

に不快感を広げる。

「あ、秋葉？どうかしたか？」

「……兄さん、臭いです」

「………？」

「早急にお風呂に入ってきてください。兄さんを問い詰めるのはその後にします」

「ゑ？」

壁ドギャンツが解除される。風呂に行けということらしい。

「しっかりと、隅々まで洗うんですよ？」

「ゑ？」

純粹にショック。ただただショック。

幽鬼のように覚束無い足取りで風呂場へと向かう。

頭が真っ白なまま服を脱ぎ、

温水のシャワーを浴びてようやく、僕は我を取り戻した。

……これか　？僕が嫌われてる理由は。

確かに夏海も、僕の匂いがどうか言っていた。

シャワーの水が、何故か少しだけしょっぱい。

そうか、僕は臭いのか。だから嫌われているのか。

「……う、うう、うわああああああああ　！！」

この後滅茶苦茶体洗った。



「皮膚がいたい」

赤く染まった体が外気に触れるだけで痺れを告げる。
バスタオルは特に激痛だ。

「あれ、服だ」

籠の中に丁寧に畳まれた僕の部屋着が置かれていた。
秋葉が用意してくれたのだろうか。

いうところが好かれる人と嫌われる人の違いなのだろう。

ならない。……なんかいい匂いもする。最高だ。

少しだけ晴れた心でリビングへ戻る。

……ん？　　？といふかなんで秋葉は僕の部屋着を持ってるんだ？

た。

17

リビングに佇む秋葉の数字が、二つも上がっていたのである。

「な、なんで上がってるんだ？」

から聞いてください」

「……………何を意味不明なことを言ってるんですか兄さん。いい

??? 好感度は確かに上がっている。しかしそれに反比例するかのよう、秋葉の口端はいつも以上に固く下がっていた。

ああ、そうか、僕の臭いが落ちたからちよつと好印象なのか。……じゃあ口角が下がってる理由はなんなんだ。分からん。

「——はああ。……前々から言っている通り、兄さんの学校内での行動は私の評価にも関わってくるんです。変に目立つ行動は控えて下さい」

やけに長い溜息の後、秋葉は僕への不満を吐き出した。口だけでなく目線でもありありと軽蔑の意を示してくる。僕は何故好感度が上がったのかの言及もできずに縮こまるしかなかった。

「家では素でいいですから。兄さんのそのみつともない姿を見るのは私一人で十分でしょう」

自己犠牲の精神を実兄に対して使ってくる妹。つらい。

「まあ、努力はするよ」

そつと秋葉から目を背ける。今日の学校では軽く目立ってしまった自覚はある。そう、広角さんの様子がおかしくなったときだ。皆の好感度は下がっていたし、僕

の評判はますます悪くなった。——もしかしてそれこそが広角さんの狙いだったのか？ 僕を更なる嫌われ者にする為の作戦？

悲しみと説教のダブルパンチでだいぶ心が抉られてきたので、逃げるように自室に戻る。ここで居座ると、秋葉の説教は延々として止まらなくなるのだ。

「——兄さん」

が、その途中で呼び止められてしまった。

「まだ何か？」

「ええ、一つだけ」

秋葉が呼び止めてまで聞きたいこと、思い浮かばない。

「今日、辺和夏海と会いましたか？」

「……やばい。」

「兄さん、何度言えば分かるんですか。あの女とは金輪際関わらないでください」
僕の妹矢羽猪秋葉は、ものつすぐく辺和夏海を毛嫌いしている。優等生と不良という対極に位置する二人は、まさに犬猿の仲と言って然るべきだ。

「ど、努力はするよ。ハハハ……」

僕だって近づきたくないのが本音。好感度〃15〃の不良だ。怖すぎる。しかし、夏海は僕がどこにいても嫌がらせのように現れるのだ。

前の修学旅行にまで現れた事件はとても怖かった。不良のフットワークの軽さは異次元らしい。

結局、僕は曖昧な笑みを浮かべることしかできず、足早にリビングから退散した。
……あ、なんでこんな早く帰ってきたのか聞きそびれた。

妹に怒られる昼(裏)

——私には秘密がある。兄さんには言えない秘密。

「早急にお風呂に入ってきてください。兄さんを問い詰めるのはその後にします。しっかりと、隅々まで洗うんですよ?」

兄さんを風呂に行かせた後、私、矢羽猪秋葉はこっそりと洗面所に侵入する。その時には既に、普段兄さんに見せている“兄嫌いの妹”という仮面が剥がれていた。

「……兄さんから、あの女の匂いがしました。辺和夏海、あの雌犬が。下品に擦り寄りやがって……」

腹の底から沸き上がる激怒の熱が、思わず口から零れる。幸い、シャワーの音が少しの物音はかき消してくれた。

——そう、端的に言ってしまったえば、私は兄さんが超大好きなのだ。崇拜しているといってもいい。

「兄さんが汚れてしまいます……それはダメです。兄さんは崇高な存在なんです。私が守らなくては」

洗濯カゴの中から、一番上のワイシャツを取り出す。

先程まで兄さんが着ていたワイシャツ。

食虫植物の甘い蜜に誘われる虫の如く、無意識のうちにワイシャツを掴む手が持ち上がっていく。

白い布地に、鼻先を埋めた。

「~~~~っっっ♡♡♡」

瞬間、脳まで突き抜ける魅惑の香り。

視界がフラッシュをたかれたように点滅し、平衡感覚すら怪しくなる。

「にいさん♡これっ、すごいです♡」

兄さんの匂いが、頭の奥までガツンと響いた。

「にい、さん♡にいさんっ♡またおかしくなっちゃいます♡♡いつもみたいに、に
いさんにあたまこわされちゃいます♡♡」

毎日欠かさず兄さんの脱ぎたてを嗅いでいるのだが、永遠に慣れが来ないのは何
故なのだろう。

「はああ♡すうー♡♡すうー♡♡………チィッッッ

!!」

しかし唐突に、本当に唐突に、蕩けきった瞳が一転、凄まじい舌打ちを繰り出
した。

恍惚から一転、ふつつつと煮え滾る怒りに奥歯を噛む。

「辺和、夏海ィ!!!!!!」

兄さんの素晴らしい香り。

簡単に私の脳みそを壊し得る魔性の香り。

そんなこの世で最高の価値を有するとさえ言える至高の香りに、穢れが混じっ
ている。

卑しい雌犬の獣臭。

兄さんの香りが良すぎるが故に、その不純物がこの上なく不快だった。

……許さない。

アイツさえ居なければ、私は今頃完膚なきまでに兄さんの匂いに叩きのめされて、破壊されて、グチャグチャにされて、染め替えられて、狂わされて、支配されて、理性も知性も吹き飛んで、真正銘兄さん以外何も見えない傀儡になることができるだろうに。

兄さんに徹底的に壊される。一つの至高である。それを邪魔された。最早生かしておけない。兄さんを汚す者が生きていいはずがない。

「兄さんは私が守ります」

ワイシャツを自分の体に押し付けて、アイツの匂いを上書きする。

「他の雌共に、穢させるものか……っ

!!」

固く誓い、

気を、引き締めた。

——それにしても、私は今兄さんとドア一つ挟んだだけの場所でこんな痴態を晒しているんですね……♡♡

今一度現状を見直し、

気が緩んだ。

——幼少期の私は、愚かにも兄さんのことを嫌っていた。見下していた。ああ、思い出したら殺したくなる、あの頃の自分を。しかし軽蔑はやがて愛情へと変わり、そしてあの日、崇拜へと昇華した……。

兄さんのワイシャツの匂いを私で上書きした後、私の部屋にストックしてある兄さんの部屋着を洗面所に残して出た。

それもまたしっかりと体に押し付けてマーキングした物だ。兄さんの匂いと私の匂いが混ざるところを想像すると身体が熱くなる。……あとこれは不純物

では無い。何故なら兄さんと私は運命で結ばれているからだ。寧ろ正しい状態。さて、次はリビングでやるべきことがある。

乱れた息を一度整え、リビングに入った。

他のものには一切の目もくれず、"ソレ"へと一直線に進む。

コーラである。兄さんの、飲みかけ。

兄さんは慈悲深い性格で、時たまこうして恵みを与えてくれる。

その飲みかけ、食べかけのものに私は毎度口をつける。

間接キスなどというちゃちなものには無い。この行為はお互いの愛を確かめ合う愛情表現なのだ。

兄さんと溶け合ってひとつになる感覚。何にも変え難い快感。本当に、いつも壊されそうになってしまう。ギリギリで踏みとどまれる私は凄いと思う。

……さて、そろそろ兄さんもお風呂から上がってくる頃合でしょう。やるなら急がなければなりませんね。

——深呼吸。精神を落ち着けて、兄さんの全てを感じるよう全神経を研ぎ澄ます。

「——んっ」

コーラを、飲んだ。

「っっっ♡♡♡」

広がる風味。口が幸せに満たされる。

くうっ♡き、きたっ♡♡いま♡兄さんと♡ひとつになってる♡♡♡兄さん♡♡♡

に
い
さん
♡
♡

ああ、コレだ♡やはり、この頭を壊されそうになる感覚、たまらな
パチンッ、と口の中でなにかが弾けた。

「あえ？」

瞬間、脳天まで、重い快樂の爆発が轟いた。

くうふッ!!!!??!!??
 ……はぎゅうふッッ♡♡♡

えっ♡♡な♡な♡にこれ♡しらない♡こんな♡きもちいいの♡♡しらない♡♡
パチパチと、口の中で快楽の花火が絶え間なく爆発する。

♡♡♡あぁあぁあぁあ♡♡♡たんしゅん♡♡♡たんだめ♡♡♡たんしゅん♡♡♡ごい♡♡♡ちのなかで♡♡♡に♡♡♡さん♡♡♡は♡♡♡じ♡♡♡けて♡♡♡ま♡♡♡し♡♡♡ゆ♡♡♡♡♡♡

そう、コーラの炭酸が、彼女の口内を蹂躪していた。

彼女は、毎回お茶やジュースで自我崩壊寸前まで行っていたのだ。コーラなんて刺激の強いものを飲んだら……。

しぬっ♡しぬっ♡♡に♡い♡さん♡に♡ころ♡され♡り♡ゆ♡っ♡♡♡脳♡み♡そ♡ぐ♡ち♡や♡ぐ♡ち♡や♡に♡溶♡か♡さ♡
れて♡も♡ど♡れ♡な♡き♡ゆ♡な♡り♡ゆ♡っ♡♡♡に♡い♡さん♡に♡ころ♡され♡て♡♡♡に♡い♡さん♡な♡し♡じ♡や♡生♡き♡

れない廃人にうまれかわっちゃいました♡♡♡

いや、そうはならんやろ。

ああ♡♡だめっ♡廃人なんかになったら、もうにいさんにさからえない♡♡
にいさんの命令ぜんぶきく奴隷になる♡♡家族の関係から、主従関係に格下げされ
ちゃう♡♡そんなのやだ♡ぜったいやだ♡あっ♡♡でも♡♡むりだっ♡♡むりっ♡
こんなのがまんむりっ♡わたしここでおとされりゅんだ♡♡にいさんにころされ
りゅんだ♡♡ああ♡きつとにいさんが私に堕ちろって命令してる♡♡だってこんな
にきもちいいもん♡♡蔑んだ目で見下しながら♡堕ちろって♡♡ああ♡♡堕ちま
す♡♡♡矢羽猪秋葉♡♡今日からにいさんの奴隷です♡♡♡絶対服従を誓います♡
♡♡とりかえしのつかない屈服宣言します♡♡♡たくさんこき使ってください♡
♡ああ♡おちる♡おちるう♡♡にいさん♡♡♡にいさん♡♡♡

理性を手放す。もう、二度と戻ることは無い。しかし引き換えとして、この世の
ものとは思えない快楽を得られるだろう。

矢羽猪秋葉が、堕ちる。

——その、寸前。

「あれ、服だ」

洗面所からの呟きを、耳が捉えた。

——あつ。

火を灯したのは、微かな未練と絞りカスの理性。

兄さんの奴隷に叩き落とされるのは幸福の極みではあるが、同時に兄さんの妹という立場が崩れ去る恐怖もあるのだ。

そしてその、私の中の“妹”が、霞に消えようとしていた最後の理性が、“兄”という存在の再認識により、今まさに手から飛び立つ私そのものを死に物狂いで捕まえた。

何とか、本当にギリギリで、私の理性は踏みとどまる。

——が。

その結果、もっと悲惨なことが起きてしまった。

本来、己が尊厳全てを贄に得られる絶大な快楽。

ギリギリ過ぎたのだ、理性を取り戻すのが。私の脳は、既に私が尊厳全てを投げ

捨てたという信号を全身へと送信してしまった後だった。

つまり何が言いたいかと言うと、その**快樂が襲ってくる**ということだ。

しかも、さらに、その上、あろうことか、取り戻したての理性とは、いわば眠りから覚めた直後の脳と同じ状態。まだ、上手く働いていないのだ。そういった脳は通常の何倍も狂いにくい。だってまだ狂えるほどの起動がなされていないのだから。そうして引き起こされるのは、本来狂ってしまうほどの衝撃が、決して狂えない状態の体流れ込むという現象。

「こほっ♡♡♡♡」

脳を直接殴られたような重い快感。

如何ともし難い衝撃に、決して女子高生がしてはいけない表情を晒してしまう。

まっへえ♡まっへえ♡しぬうう♡ほんとにしんじやうからああああ♡♡

らめっ♡にいきっ♡♡はやく♡くるわせてえ♡♡こんなのたえられないいい♡♡♡

♡おねがっ♡しましゅっ♡♡わらひのりせい♡もてあそぶのらめえ♡♡♡

ホワイトアウトする視界。しかしその脳は依然として鈍らず、新鮮な快楽に蹂躪され続ける。

私の中で、兄さんの存在がドンドンと肥大化していくのを感じる。愛が、膨れ上がる。

に い さ♡♡に い さ♡♡♡♡つ よ っ♡♡つ よ す ぎ ま し ゆ♡♡こ ん に や の♡じ え っ た い
か て ま し え ん♡♡♡♡♡

“ 15 “ ↓ “ 16 “

一つ、己の中で愛の枷が外れた気がした。

あ っ っ♡♡♡♡い ま の♡し ゅ っ♡♡あ た ま っ♡に い し ゃ ん に♡♡つ ぶ さ れ り ゆ
う♡♡♡♡

“ 16 “ ↓ “ 17 “

あ ぎ ゆ ふ っ っ♡♡♡♡ん う っ♡♡す き♡♡♡す き で し ゆ♡♡♡♡に い し ゃ ん♡♡♡
に い し ゃ ん♡♡♡♡♡

いつの間にか、身体中の感覚が薄れ、ソファにへたりこんでいた。

は あー♡♡♡は あー♡♡♡♡に い し ゃ ん う♡♡♡

身体が限界を迎え、指一本すら動かないままソファに沈む。

濁流のような熱が漸く引いていく。長い拷問がやっと終わるらしい。

少しづつ息を落ち着かせた。

時折快樂の残滓が脳天から駆け落ち、その度に身体を震わせる。

——んくう♡にいさん♡すき、です♡はふっ、はっ♡愛して、ます♡♡

ゆっくりゆっくりと、思考力が戻ってきた。だが、暫くはここを動けなそうだ。もうすぐ兄さんもリビングに来てしまうだろうし、急いで回復しなければ……

…。



軽い瞑想に瞼を閉じること数分。

熱い疼きを完全に抑えられた訳では無いが、何とか平静を保てるぐらいには復活した。

と、ちょうどそこで、リビングのドアが開く。

当然出てきたのは、私の匂いが染み込んだ服を着る兄さん。

……っ♡

——はっ!? 危ない、風呂上がりの兄さんに悩殺されるところでした。

一瞬で沈めた情欲がぶり返しかけた。

集中しなければ直ぐに持ち上がってくる口端を努めて押し下げ、内心を悟られないようにする。

「な、なんで上がってるんだ？」

はぐうっ♡♡♡

ま、まさか、密かにニヤけたことが、口端が上がっていたことがバレた!?

だ、ダメです！そんな事になったら、家族に欲情する変態の烙印押されちゃいます……♡

「……………何を意味不明なことを言ってるんですか兄さん。いい

から聞いてください」

私は今ちゃんと言葉を発せられているだろうか？もしかしたらバレているんじゃないか、そんな考えが脳を鈍らせる。

「——はああ♡♡……前々から言っている通り、兄さんの学校内での行動

は私の評価にも関わってくるんです。変に目立つ行動は控えて下さい」

.....

結局、兄さんが部屋に戻るまで私が変態だという事実には気づいたのかは分からなかった。

しかし、何はともあれ、今日も狂わずに耐えきれたのだ。

毎日、私は兄さんに壊されそうになるが、ギリギリ耐え抜いている。

耐えれば耐えるほど、壊れた時に襲い来る快楽の津波は大きくなることだろう。その日のことを夢見て、私は毎度正気を守り続けているのだ。

.....まあ、そんな私の精一杯の努力も、兄さんにただ一言「堕ちろ」と

言われてしまえば、一秒とかから崩れて消えるのだが。

私が今まで我慢に我慢を重ねて積み上げてきた努力を、片手間に、手軽に、お構い無しに、まるで目障りな羽虫を払うかのような雑さで、いとも容易く潰されてしまふ光景が、脳内スクリーンに映し出される。

まずい、再度身体が火照ってきた。兄さん、素敵すぎます。

……しかし、最近兄さんの衣服や飲み物から感じる快樂が増している気がする。

もう、私が狂ってしまうまでそう時間は残っていないのかもしれない。

その時が来れば、私の秘めた心も露見して、きっと兄さんに蔑まれてしまうだろう。そうして、その後、兄さんの命令がなければ何もできない私を、命令されればどんなことだつてする私を、嘲笑しながらも便利なペットとして飼ってくれるのだ。その素敵な日々を夢想して、私は残り少ない理性を守る。

だが、狂う前に、やっておかなくてはならない事がある。

辺和夏海。奴を殺す。それと、今日の兄さんから感じたもう一つの雌の臭い。おそらく、兄さんのクラスメイトのあの女だろう。前に兄さんを欲情の籠った目で見つめていたことを覚えている。こいつも、生かして置いてはダメだ。

兄さんに危害を加えそうな奴らは、一人残らず排除してやる。

……だから、

だから、それも終わって、いつかその日が来たら、思いつきり壊してくださいね、

兄さん♡



「……」

暗い部屋で、複数置かれたモニターの画面だけが光っている。

「……この子は、いつも通り、大丈夫そう、だね」

ぼつりぼつりと、抑揚の乏しい声が零れる。女性の声だ。

モニター群に写っているのは、紛れもなく、矢羽猪直来の家。

その女は、矢羽猪秋葉が乱れる姿を、最初から最後まで見ていた。

その上での、大丈夫という言葉。

納得したように頷くと、その女は矢羽猪秋葉から目を離す。移した視線の先には、矢羽猪直来の姿。数台のモニターが、あらゆる角度から直来の部屋を写し出していた。

その不気味な存在は、自室で過ごす矢羽猪直来をじっと見つめる。暗い部屋で一

人、
直来だけを見続けていた。

後輩が出待ちしてる朝

朝、強い光が瞼を焼く。どうやら、珍しく早起きできたらしい。

昨日見たあの悪夢が再来するともなく、至って健康的な熟睡だったからか、スツキリとした寝覚めだ。

軽く尾を引く眠気を欠伸で振り払いながら、リビングに向かう。すると、奥のキッチンからまな板を叩く音が響いてきた。

「今日は早いんですね、兄さん。朝早くから兄さんの顔を見なければならぬなんて……」

早起きして怒られた……。

リビングと地続きになっているキッチンを覗くと、やはりと言うべきか、“17”を浮かべる秋葉の冷気を纏った眼差し。ありありと拒絶の色示す眼光に、寝起き早々げんなりと気分が落ち込んだ。

「もうすぐ朝食の準備ができますので座っていてください」

「……なんか手伝う　？」

今更なんだけど妹のご機嫌取りに努める兄って情けない気がする。いや、まあ、本当に今更なんだけど。

「は？兄さんに家事をやらせるわけないじゃないですか。少し考えたらわかるでしょう？」

切れ目の双眸を一層細めて吐き捨てるように責めてくる。信頼の薄さ凄い。

「それに、兄さんの手がかかった料理を食べるなんて、想像しただけで震えてきます」

……酷くない　？

本気で顔を青くして戦慄く秋葉にこっちが震えそう。

目尻を濡らしてテーブルの椅子に腰掛ける。

包丁のリズム以外に音のない気まずい空気を残して、時計の針が焦らすようにゆっくり進んでいく。

暫くして、秋葉は白米やら味噌汁やら魚やらを持ってきて慣れた手つきで食卓を

準備し始める。

今日は和風らしい。

流石の僕も悪いと思い、手伝おうと腰を持ち上げた。

……が、秋葉に凄まじい眼光で制されて無言で再び腰を落とす。こわい。

目の前に並べられていく和食の数々に、居心地の悪さを抑えて座るしか無かった。

「……………」

またまた沈黙の時間の後、やっとのことで朝食の準備が全て完了。

秋葉も僕の斜め前、つまり対角線上に座る。……そんなに離れなくても。

きっちりテーブル上で一番遠い席に陣取る秋葉。

何気ない日常の嫌悪が心に刺さる。本当に心の底から拒絶していますと見せつけられていたようで。

「……………何見てるんですか、さっさと食べてください」

「あ、はい」

誰かが食事を一家団欒の場だと言っていた。その人が今の光景を見たらなんて言うのだろう。

箸の音だけが響く食卓。なんて息苦しい場。

ただただ気まずいだけの食事を、僕はいつもの様に急いでかきこみ食べ終わった。

「ご馳走様でした……」

そそくさと食器を洗い場まで持って行く。

「——兄さん」

「な、なに？」

食事中に秋葉から話しかけてくるなんて。珍し過ぎて反応が遅れてしまった。

「食器はそこに置いておいてください。勝手に洗われても迷惑です」

最早この家で僕がしていいことを探すのすら難しいかもしれない。ここ僕の家でもある筈なんだけど。

「あ、はい、じゃあお願いします」

低姿勢。ひたすら低姿勢を意識する。

取り敢えず低姿勢でいれば人として大事なものの以外を失わないで済む。

へへへっ、と薄く笑いながらコップに残った飲みかけのお茶を洗い場に捨てた。

「——あっ」

飲みかけのお茶が水道に落ちる音に紛れて、とてもか細く、女の子らしい声が微かに聞こえた。

……え　　？　なんだ今の声。秋葉か？ いや、あんな声を冷徹を押し固めたような秋葉が出すか。でも、確かに聞こえた。

「……なに突っ立ってるんですか。これ以上兄さんと同じ空間にいるのは限界なのでさっさと部屋に戻ってください」

こちらには目線すら向けないで、秋葉は上品に箸を動かしている。

その姿に、か弱さなど微塵も無い。堂々と、凜とした姿だ。

やはり、先程の声は聞き間違いだっただろう。まだ寝ぼけているのかも。家を出る時間までまだ少しある。部屋に戻って二度寝しよう。



「――兄さん……♡」

兄さんがリビングを後にした瞬間、私は表情筋の制御を手放した。

……危ない。あともう少しで、兄さんの前で下品に蕩けた顔を晒してしまふところでした。

兄さんが同じ空間にいる。それだけで自然と身体が反応する。

特にあの時、私があさましくも兄さんの飲みかけのお茶を確保しようと画策した時。

まるで私の心を見透かして、見下して、嘲笑うかのように、お茶を流しに捨てられた。

私が喉から手が出る程欲したものを、目の前でいとも容易く散らしてしまう兄さん。

理性が兄さんの気まぐれで転がされている。

それを理解した瞬間、私は雑魚なんだと否が応でも再認識させられて、思わず兄さんの足元に土下座屈服宣言しようと思った。

しかし、幸か不幸か、私はその時全身を流れる快楽の電流に腰が抜けていた。土

下座以前に、椅子から移動することさえ叶わなかったのだ。

もしも腰が抜けていなかったら、私は今頃兄さんの足元で無様に這いつくばって足を舐めていただろう。もしくは、四つん這いで椅子になっていたかもしれない。今までの鬱憤晴らしに、サンドバッグになるなんてことも……。

最高の妄想が頭を巡りはするが、身体への直接的な刺激がないため、生殺しである。

焦れたい思いを強制される。おそらくこの身体のはてりは学校に行った後も暫く続くだろう。狂おしい程に腹の奥が疼くのに、それを収めることなく一日を過ごせと言われているのだ。拷問のような、生き地獄のような一日が始まる。

だが、だがそれでも、この苦しみも兄さんから与えられたモノだと意識すると、お腹の奥がより一層、きゅうっと締め付けられてしまうのだった。



そろそろ出よう、と思い準備を始める。秋葉の気配は無い。もう既に登校したの
だろう。そう分かれると少しだけ気が楽になる、それに加え先程までの仮眠の影響も
相まって、今の気分はなかなかスッキリとしていた。

今日も好感度を上げていく決心をして、玄関を出る。

「おはようございますっす！ナオキ先輩！」

……こっわ。

一旦ドアを閉める。

頭を整理しよう。家から出たら夏海が出待ちしていた。こっわ。

何故か僕の家を知っていて、何故か僕の家まで来ている。……もしかしてこれ、カチコミというやつでは？

「ナオキせんぱーい？どうしたんすかー？出てきて欲しいっすー！」

ドアがドギャンドギャン叩かれる。ドンドンではない。ドギャンドギャンだ。秋葉も夏海も、物を叩く時の加減を知らないらしい。いや、どちらかというと僕への加減を知らないのか。嫌いな人に対して攻撃的になるのは分からなくもない。

早朝から好感度を上げる必要性を改めて理解してしまった。

「学校行かないっすかー？ あっ!! もしかして今日は家で遊んでくれるっすか!？」
平日の朝とは思えない澆刺とした声音と、轟音を鳴らして軋むドア。そのギャップがとても怖い。笑いながら人を殺すサイコパスのようだ。

夏海が笑いながら襲ってくる姿を想像してしまう。普通にありそうなその光景に血の気が引く。急いで状況の打開策を考えなければ。

この状況の打開策、則ち夏海にボコられない為にすること、いろいろ必死こいて考えるが、結局は機嫌を取って好感度を上げるしかないという考えに帰結する。そう考えたとき、家で遊ぶ、という夏海の言葉は妙案に聞こえた。

前回の「犬ごっこ」では、ものの数十分で好感度が2も上がったのだ。今回もその要領で夏海に構いまくれば完璧だ。

未だ鳴り止まぬドアの前で深呼吸する。荒ぶる不良少女の前に出ていくのは怖い

が、好感度という可視化された他人の心が僕に勇気を与えていた。

意を決して、ドアを、開ける。

「ナオキ先輩♡わぁ♡ナオキ先輩が出てきてくれたっす♡♡ナオキ先輩♡ナオキ先輩♡いっぱい遊びたいっす♡♡ナオキ先輩♡ナオキ先輩♡」

ダメだ。

ドアを開けて夏海を見た瞬間そう悟る。夏海の目は、どこまでも捕食者の色をしていた。

わかった。わかったぞ。やはりこれはカチコミなのだ。僕を密室に連れ込んで、誰にも見つからずにボコボコにするつもりなのだ。

瞳孔は限界まで開き、頬は朱色に染まっている。荒く乱れた呼吸を繰り返す彼女は、極上の肉を前にした猛獣を想起させた。

この姿を見たら、家で遊ぶという選択がいかに愚かかはつきり分かる。忘れてはいけない。辺和夏海は最凶の二つ名が付くような不良だ。そんな不良にとっての遊びが、常人の考えるものであるはずが無い。

「が、学校に行かない？……行きませんか？」

媚びた笑みで語りかける。

「？なんで敬語なんすか？先輩は私より『上』なんすから、タメ口でお願いします」
そうか、不良は年功序列を大切にするのか。漫画で読んだことある。

「よし、じゃあ、学校に行こう……行かない？」

ちよっと命令っぽくなったから言い直したけど……大丈夫かな。

ビクビクしながら夏海を見る。

「はい！先輩が言うなら！」

大丈夫だったっぽい。

「じゃあ先輩、どうぞっす！」

そう言って夏海は首を突き出してくる。

何が？と思いつつ夏海的首元に目を向けると、だいぶ大きなチョーカーが巻かれていた。

……いやこれチョーカーなのかな。

チョーカーというにはあまりに大きく、装飾も地味だ。犬の首輪と言われた方が

納得できる。そして極めつけに、そこから一本の紐が伸びているのだ。明らかにそれは、チョーカーではなかった。

「さっ、どうぞっす！」

夏海が両手の上に紐を置いて差し出してくる。

……………う、嘘でしょ？

これはもしかして、*“犬ごっこ(散歩ver)”*をやろうとしている？マジで？逮捕されるよ僕。ま、まさかそれが狙い!?

これは拒否だ。流石に拒否だ。逮捕なんて冗談じゃない!

「先輩♡先輩♡うううっ♡♡はやくっ♡早くして欲しいっ♡♡ねっ♡先輩♡♡先輩♡♡」

「……………」

「あうう♡先輩♡先輩♡先輩っ♡♡もう私、我慢できそうにないっすよぉ♡♡あううう♡♡」

「……………」

圧。夏海の瞳には、有無を言わせぬ圧が暗く潜んでいる。しかし、警察のお世話

になるということは、一般的に考えて何より避けねばならない事態だ。固唾を飲みながらも、僕は決意を示すかのように手を固く握る。

「先輩♡ううう♡……あうう !!」

「うわっ!？」

夏海が突然飛びかかってきた。抵抗する間もなく押し倒される。馬乗りになり、異常なほど息を荒らげる夏海。

「ちょ、ちよつとまつ」

「ううう♡♡」

身をよじるも、夏海はすぐに僕の右腕を捕らえて抑えつける。

掴まれた腕から、圧倒的な力量差を感じる。振りほどこうとしてもビクともしない。夏海の顔は、いつかの不良との乱闘の時に見た獣の顔に酷似していた。

ぐいっと右腕を引っ張られる。夏海は抱き抱えるようにして僕の腕をロックした。次いで、僕の握ったままの拳に指を這わせる。親指、人差し指、中指、と握り拳が解かれていく。

やがて晒された僕の手のひらに、彼女は首輪の紐を大事そうに置いた。

僕の頭は混乱を極めていた。今どういう状況なのだろう。周りに助けを求めたくても、どうしてか夏海の瞳から目を逸らせない。囚われてしまったかのようだ。今までで最も長く人と目を合わせていると言っても過言ではないだろう。

紐が乗った僕の手にも、再び夏海の手が絡みつく。今度の彼女は、僕の指を一本一本折りたたんでいった。目を動かすこともできず、ただ紐の冷たさと、夏海の温かさ、そして力強さを手のひらに感じるしかない。

「あうう♡♡あうう♡♡」

夏海は僕の顔を見たまま、媚びるように体をさすりつけてくる。

犬のような鳴き声と仕草。僕に握らせた首輪の紐。夏海はやれと言っているのだ。ここで、“犬ごっこ”を。

自分の立場を再認識する。パシリ、すなわち夏海の欲望を満たすための道具ではないのだ。僕の事情など考慮されるはずもない。

一瞬の葛藤。やるか、やらないか。あらゆるリスクを鑑みて、僕は――

「が、学校まで、一緒に行こうか」

“犬ごっこ”を引き受けた。

社会的な死よりも、肉体的な死を恐れるのは至極当然の思考と言える。

その言葉を聞いた瞬間、夏海の顔に花が咲いた。

「わぁ♡わぁ♡♡」

夏海が僕の上から降りて地面に座る。正しく“待て”の体勢だった。

言葉を忘れてしまったかのように意味を持たない声を繰り返している。とてつもなく嬉しそうに目を輝かせて僕を待つ。

今更やめることなどできない。僕は紐を握りつつ、恐る恐る立ち上がる。

止めどない冷や汗を感じる余裕も無しに、意を決して、僕は一步踏み出した。

直後、視界がよろける。

「——あぐっ♡♡♡♡」

……………お、おわた。

本当におわた。今回ばかりはほんとうにおわた！湧き上がる恐怖と一種の諦めを込めて、足元に転がる小石を眺める。

俺が一步踏み出したその下には、この石ころが待ち受けていたというわけだ。石を踏みつけ体勢が崩れる。すると当然、紐で繋がれた夏海も引っ張られる。それも首を。

頭によぎる幾通りの選択肢。逃げる、戦う、助けを呼ぶ e t c e t c。結局俺が選んだものは…… “めっちゃくちゃ謝る” 問答無用でこの一択だった。

「な、なつみ………さん　？」

声が震えているが、そんなこと気にしてられない。夏海の名前を呼びかけつつも、回らない頭で謝罪の言葉を考える。

夏海は今、地面に手を着いたまま顔を伏せてしまっている。

体が小刻みに震えているのは、見間違いだはないだろう。

「はあ———っ♡♡はあ———っ♡♡」

荒く長い息、その声音もまた震えている。

プチ切れという言葉がピッタリな有様に見えた。

そしてトドメを重ねるかの如く、視界の端でサラリーマンが携帯を動かし始める。あの慌てよう、警察に連絡するのではなからうか。人はこれを死体撃ちという。

死刑宣告を待つように立ち竦んでいたその時だ。

……唐突に、突然に、感じたこともないような寒気が沸き起こった。

「——っ!？」

初めて感じる。これはきっと、殺気と言われるものだ。

遠巻きで通報を試みていたサラリーマンが、持っている携帯すら投げ捨て逃げ出した。俺より数段顔が青い。と、とりあえず、社会的な死は免れたようだ。しかし、この後にもっと避けねばならない肉体的な死が待っている以上、そんなこと些細な違いに感じられてしまう。

「ナオキ先輩っ♡♡」

「——っ!! は、はい」

上手く動かない喉からなんとか言葉を絞り出す。

「はやくっ♡♡はやく”おさんぽ”しましょっ♡♡」

”15” ↓ ”16”

「えっ!？」

夏海が顔を上げ現れた紅潮気味の笑顔。それが向けられた瞬間、嘘のように殺気が霧散する。

それと同時に、好感度が上がった。

……許された　　？　　なんで？

分からない。展開が突飛すぎて、何が彼女の機嫌を直したのかまるで分からない。分からなすぎてすごい怖い。

溢れ出る嬉しさオーラを感じる気がするが、それが本当に嬉しさオーラなのかも謎。

夏海が歩き始めた。

一から十まで意味不明だが、首輪の紐を持っている以上離れる訳にはいかない。当惑を胸に、僕も彼女を追って足を進める。今度は地面に気をつけながら。

足元を注視していたら、あるものが目に止まる。

先程のサラリーマンの携帯、その潰された姿である。

なぜ潰されているのか、原因は簡単だ。この目で見ていた。

俺を先導する夏海が、思いっきり踏み潰して行っただ。明らかに故意だった。

……やっぱり怒ってる ? もう本当に分からない。たすけて。



「——この子は大丈夫、なのかな?」

暗い部屋。無数のモニター。女は椅子に座って、一つの画面を凝視している。
街中の路地。そこには二人の高校生の姿があった。

女は首を軽く傾げつつ、定めるような視線で片方の学生を眺める。

その瞳は、およそ生きているとは思えないほどの無機質な色を灯していた。

「もうちょっと、観察して、みよう……ね ?」

女は語りかける。その意識の先には、一つのぬいぐるみ。そのぬいぐるみは、先のモニターに写っているもう片方の姿に、不思議とよく似ていた。

寝たフリしてるだけの朝

感想で言われたとおり、好感度がポンポン上がって上限突破の特別感が薄れてるのはそうなのよね。あと好感度が上がる前と上がった後との変化を上手く書いて無いのも問題か。ムズい。

どっと疲れた。朝起きて妹に罵倒され、登校では猛獣を片手に白い目で見られ、まだ一限も始まっていないにも関わらず、僕の疲労はピークに達していた。

朝のHRまでの時間は、机に突っ伏して過ごす。これには、疲労回復の目的と、極力存在感を出さないという目的がある。いつも秋葉から目立つなと言われている。この言いつけを守らなければ、あとが怖いのだ。そもそもコミュ力不足で話しかけたくても無理なんだけどね。

まあもう夏海と会っちゃったし言いつけ破ってるけど。……また一段やる気がなくなった。バレるかな。バレないといいな。

暗い思考が延々と続くので、僕は耳に意識を向ける。クラスメイトの会話を聞き、参加した気分を感じて気を晴らすのだ。机に伏して視界が遮断されている分、より音に敏感になった。

「やあ、おはよう春香さん。今日はいいい天気だね」

隣の広角さんの席あたりから声。これはきつと沢屋加杉くんだろう。コミュニケーションが高くて、僕の憧れでもある。

それに沢屋くんは顔も良い。性格もリーダー気質。クラスが良く似合う人だ。

「……………うん、おはよう沢屋くん」

返す広角さん。変な間があった気がしたけど、どうしたんだろう。

沢屋くんを皮切りに、他のクラスメイトも広角さんに挨拶していく。相変わらず広角さんは人望が凄い。

人が集まって騒がしくなる。いったいどうやったらここまでの人気者になれるのか。瞼を軽く持ち上げ、薄目で広角さんを見た。

「——あっ♡」

……滅茶苦茶目が合った。

薄目で見ていることもバレているっぽい。現在進行形でこちらを見つめてきてるし、何より俺が目を開けた瞬間広角さんは小さく声を上げたのだ。確実にバレている。

広角さんが例の雰囲気纏う。そう、肉食獣の雰囲気。広角さんの心の中は、何盗み見てんだよ潰すぞ、といった感じと予想する。

怖いし気まずい。

早く目を逸らした方がいいのだと思うが、既に目が合って数秒は経っているのだ。今更急に逸らしても大丈夫だろうか。影でバカにされたりしないかな。

和気あいあいとした喧騒の中、僕と広角さんだけがじっと見つめ合う。

盛り上がるの中心にいる広角さんと、外にいる僕。

笑顔で圧をかける広角さんと、薄目で必死に気配を消そうとしている僕。

なんとも滑稽な対比構造は、しかし第三者によって断ち切られた。

「そうだ春香さん、今日の放課後空いてるかな？ 駅前に新しいケーキ屋さんができたらしくてさ。よかったら一緒に行かないかい？」

沢屋加杉くんが、僕と広角さんの直線上に割り込んできたのだ。

すかさず僕は顔を腕の中に埋める。

ありがとう沢屋くん。やっぱり僕の憧れだ！

でも今見た沢屋くんの数字は“3”。片思いみたいな気持ちになった。

「……………ごめん。無理かな」

広角さんの返答。やはり間がある気がする。

「そうか、なら明日とか——」

「しばらくは無理かも」

今度はすごい食い気味。

「あ、うん。じゃあ、春香さんの都合のいい日ができたら教えてよ。ああ、僕の予定なら気にしなくてもいいよ。広角さんの為ならどこでも開けちゃうからさっ！」

断られても折れない心、流石だ。

沢屋くんの爽やかな声に強い憧れを抱きながら、僕は再び寝たフリに戻る。

深い呼吸を繰り返す。寝ている時の再現だ。今度こそ誰にもバレないように頑張るぞ、と意気込んだその直後、

「——はくちッ!!」

……普通にくしゃみが出ちゃった。

は、恥ずかしすぎる。死にたい。

クラス中から視線を感じるような気がして、僕は震えながら顔を伏せることに全力を尽くした。



〈side 広角春香〉

朝起きてまず目にするのは、スグクルくんの顔。かわいい。

天井に貼られた写真からめいっぱいの元気を貰い、リビングへ。

両親とご飯を食べた後、身支度をして学校に出発する。登校中の電車で見るのはもちろんスマホ。マップを開けば、その上に青い丸が光っている。

言うまでもなく、スグクルくんの現在地だ。正確には、スグクルくんのスマホの現在地。

「んふふっ♡」

スグクルくんはまだ家。スグクルくんの部屋着を想像して、頬が緩んでしまう。とってもかわいい。

幸せで胸を温めながら、電車に揺られ学校へと向かった。

学校に着くと、今度は挨拶の練習をしなくちゃいけない。スグクルくんに最高のおはようを届けるためだ。

「広角さんおはよー」

「うんっ、おはよ！」

「春香おは☆」

「チャラちゃん、おはよっ！」

幸い練習相手は沢山いる。

声のトーン、笑顔の明るさ、その他の体の動きを細部に至るまで検証。スグクルくんの為だけに、“完璧な広角春香”を作る。

スマホを確認すると、スグクルくんが学校に着いたのが分かった。

胸が高鳴る。喜びと緊張でだ。

青い点が近づいてくる。深呼吸。先程までのシミュレーションを思い出す。

青い点が教室の前まで来て、遂に本物のスグクルくんが現れた。

「スグクルくんっ！おはようっ！」

可能な限り明るく親しみやすくした挨拶に、とびきりの笑顔を添える。

「あっ、広角さん。お、おはよう、ございます」

色んなところに目を泳がせながら、スグクルくんは挨拶を返してくれた。わああ！うれしい！かわいい！すき！たべちゃいたい！

「もう！“広角さん”じゃなくて“春香”って呼んでっていつも言ってるのに」

「あ、あはは」

スグクルくんは曖昧に笑うと、自分の席に座り机に突っ伏してしまった。いつもの寝たフリ。でも周りのお話には興味があるようで、しっかり聞き耳を立てているのも分かる。なんだか警戒心の強い小動物みたいだ。えへへ、今日もかわいいなあ。毎朝のこの時間は至福のひとつときである。視界にスグクルくんの尊すぎる姿だけを捉え、じっくりその可愛さを堪能する。うう、しあわせすぎて溶けちゃいそう。

——あれ？でもなんか今日のスグクルくんはテンションが低い感じがする。

どうしたんだろう。なでなでしてあげたい。

うーん、なでなでしちゃっていいのかな？

隣の席で負のオーラを纏うスグクルくん。正直とっても母性本能がくすぐられるす。

なでなでしにいくか、いけないか、一瞬の逡巡の後、私は本能に従うことにした。スグクルくんに優しく語りかけ、胸に抱いて頭を撫でる。そしてそのまま保健室に連れ込んで昨日できなかった続きを……。

期待に胸を膨らませながら席を立つ——その直前。

「やあ、おはよう春香さん。今日はいいい天気だね」

“邪魔な虫”が入り込んできた。

・・・・・・・・・・は？

自然と手がシャーペンシルに伸びる。が、そこで思い留まった。ここで殺^やってしまうとスグクルくに嫌われちゃうかも。殺^やるなら別の場所にしよう。

「・・・・・・・・・・うん、おはよう沢屋くん」

一応挨拶だけはしておく。“完璧な広角春香”のためだ。

その後もゾロゾロと群がってくる“虫”たち。ささくれだつ心をなんとか抑えながら対応していく。できるだけ話題を振ること意識する。そうすれば勝手にペラペラ喋ってくれる。

そうして隙を作って、スグクルくんを盗み見る時間を稼ぐのだ。

寝ているアピールをしつつもしっかり聞き耳を立てちゃっている可愛いスグクルくに、どうしても頬が緩んでしまう、そんな時だった。

「——あっ♡」

スグクルくんの頬が少しだけ持ち上がり、しっかり目が合った。不意打ちのような可愛すぎる行動に、意図せず声が漏れてしまう。運良く沢屋加杉の音量にかき消

されたようだが、危なかった。

じっとスグクルくんを凝視する。

もしかしたらバレないと思ったのかな？もう、可愛すぎるよう♡♡しかもまだ薄目で見てきてる。目を瞑るタイミングを図っているのかな？うう、可愛い♡本当に食べちゃいたい♡♡なんでそんなに可愛いのお♡♡襲っちゃうよ？襲っちゃっていいよね？いくよ？あと三秒で押し倒しちゃうからね？3、2、1――

「そうだ春香さん、今日の放課後空いてるかな？駅前新しいケーキ屋さんができたらしくてさ。よかったら一緒に行かないかい？」

……今度はシャープペンシルをしっかりと握った。

一度ならず二度までもスグクルくんとのおえっちな展開を阻んだ沢屋加杉。しかも今度は私とスグクルくんのちょうど間に割って入ってきたのだ。

「……………ごめん。無理かな」

胸中に殺意の渦が巻く。少しでも気を抜けば、そこをどけと、口から出てしまいうさだ。

殺りたい。でもスグクルくんに嫌われたくない。

「そうか、なら明日とか——」

「しばらくは無理かも」

うるさい。喋るな。心の中の葛藤が、殺意の方へ傾いていく。

「あ、うん。じゃあ、春香さんの都合のいい日ができたら教えてよ。ああ、僕の予定なら気にしなくてもいいよ。広角さんの為ならどこでも開けちゃうからさっ！」
心底気持ち悪い。ああ、ダメだ。負の衝動が抑えきれない。

黒い感情に塗り潰された頭の片隅で、スグクルくんのことを想う。うう、スグクルくん、スグクルくん、私、悪い子になっちゃうかも、うう、ごめんなさいスグクルくん……。

ペンを持つ手に力が籠る。沢屋加杉目掛けて手が動き出す。

「——はくちッ!!」

瞬間、私の中の全てが吹き飛んだ。

か、かわ、かわ、かわわあ♡♡

“13” ↓ “14”

か、かわわすぎるよ、スグクルくん。もう、すきい♡

私の頭に、もう他の“虫”たちの存在は消え去っていた。

もう、もう♡スグクルくん♡スグクルくん♡分かったよスグクルくん♡私もっと完璧になるね♡♡

今の、あの時と変わらない“広角春香”ではダメだ。もっと完璧にならなければ。スグクルくんの恩に応えなければ。うう、かわわあ♡♡



「この子は特に害は無さそうだけど……………あれ？」

モニターの一つが、突然ブラックアウトする。

「締め出された？この子に？……………訂正、この子、危険」

抑揚の薄い声がぼつりぼつりと紡がれる。

「消しちゃった方がいいかな？」

とても平然に、まるで日常的なことだともいう調子で、“消す”という言葉は零された。

「——どう思う？ スグくん」

『うん、マフユは正しいと思うよ』

「ふふ、ありがとう、スグくん」

女ひとりの部屋に、声が二つ。女の声と、幼さを感じる男の子の声。

男の子の声は、スピーカーから発せられていた。

『マフユは正しいと思うよ』

「ふふふっ、嬉しい、スグくん、嬉しい……♡」

学校でも妹に怒られた昼

……寝たフリをやめたら広角さんの好感度が上がっていた。

極力存在感を消すという身の程をわきまえた行動が好印象だったのだろうか。

秋葉の言いつけを守りながら、広角さんの好感度も上げられて、なんだかお得な気分になった。



お昼時、廊下を歩いていると、前方が少しザワついていることに気づく。

癖で伏し目がちになっていた目線を上げると、向かい側に秋葉を見つけた。

騒がしかったのは、周りの生徒が秋葉を見て小声で褒め称えているからだった。踵を返して逃げようかと思案する——が、唐突に背筋に寒気が駆け抜けて、その

思考を中断せざるを得なかった。

再び秋葉に目を向ける。……滅茶苦茶睨んできた。怖い。

秋葉は絶対零度の視線で僕を縛りつけつつ、軽い速足で歩を進めてきた。だいたい怖い。

遂に秋葉が僕の目の前まで到達する。そのまましばらく無言で見つめてくる。とても怖い。

「……付いてきてください」

小声で、僕だけに聞こえるように秋葉が呟く。付いて行ってヤンキーとかがいっぱいいたらどうしよう。

不安が湧くがしかし、僕の中に秋葉に逆らうという選択肢は存在しない。知能は言わずもがな、喧嘩でも負ける自信がある。

僕も秋葉も幼少期に護身術的なものをやっていたが、そこで秋葉に瞬殺されなかったことはない。一種のトラウマだ。

つまり僕は付いていくことしかできないのだ。情けなさすぎて泣きそう。しぶしぶと秋葉の一步後ろを追従する。

すれ違う生徒の好感度が下がっていくのを何度か目撃する。また、中には数字が現れる男子生徒もいた。僕に関心を持ったということだ。その人たち皆“3”か“4”だったけど。外から見れば、今の僕は美少女をストーキングする陰キャみたいな図になっているのかもしれない。もうどうしろと言うのだろうか。

「ここです」

秋葉が立ち止まった。目の前には空き教室。

「入ってください」

秋葉は鍵を開けてから入るように促してくる。なんで鍵もってるの？

大丈夫？入った瞬間に後ろから殴りかかって来たりしない？

しかしどんなに怖くてもやはり秋葉に逆らえるわけもないので、大人しく教室のドアをくぐる。

俺が完全に教室に入っただのを確認した後、秋葉も追って入ってきた。

——ガチャッ。

小さな金属音。

「……………なんで鍵閉めたの？」

その音は、秋葉が後ろ手に教室の鍵をかけたことをありありと物語っていた。
密室の完成だ。

「邪魔されないうためです」

な、なにを!? やっぱり殴られるの!?

「それに兄さんを逃がさない為にも」

やっぱり殴られるのか……。

「さて、兄さんに聞きたいことは沢山あるのですが、まずは——」

おお、案外話し合いの余地があるっぽい雰囲気だ。これはなんとか切り抜けられるか？

「——なんで辺和夏海と登校していたんですか？」

無理でした。

明らかに怒ってますという黒い声音。チビりそう。

「昨日散々言いましたよね？ 辺和夏海には近づくなと」

秋葉が一步近づく。僕は一步下がる。昨日もあつた気がするこの状況。

「それなのに一緒に登校とは、舐められたものですね」

一歩近づく。一歩下がる。

「さらには辺和夏海に首輪をつけていたとか」

壁際まで追い詰められる。背中に硬い壁の感触を感じた瞬間、顔の横で轟音が響いた。

壁ドギャンッだ。昨日ぶりの。

「私の言うことなど聞くに値しない、そう思ってるんですね？」

顔が近い。目が怖い。声も冷たい。匂いは甘い。

「兄さんにとっては私など雑魚で、そこら辺を飛ぶ羽虫とさして変わらない、そういうことですね？　そうですね？」

「違う違う！　全然、そんなこと一度も思ったことないから」
外れそうになるくらい首を振り、否定の意を示す。

「——っ！　私のことなど、意識にいれたことすらないと、そういうことですか」
なんでそうなるの……。

「ふふ、言ってくれますね。本当に、ふふふ、ふふふふ」

秋葉の顔に朱色が差す。ぶ、ブチ切れた。

「い、いや、僕なんか秋葉の足元にも及ばないよ」

「は？ そんなわけ—— いえ、まあ今はそれでいいです。今回の目的は別にありますしね」

「目的？」

どうやら一旦は殴られないらしい。この後の目的とやらではどうか分からないが。

「はい、辺和夏海を兄さんに近づかせないようにすること、それが今回の目的です」
秋葉が冷たく言い放つ。

「は、はあ」

どう反応したらいいのか分からず、曖昧な返事になってしまった。

夏海は好感度を上げたい人の一人だ。頻繁には言わないが、偶には会っておきたいと思う僕。

が、同時に、夏海は最も考えが分からない人でもある。笑っていると思ったら急に襲いかかってきたり、怒っていると思ったら急に笑ってきたり。どこが地雷でど

こが地雷じゃないのか見当もつかない。そんな彼女に、もう会いたくないと思うもう一人の僕。

というか、そもそも朝家の前で出待ちしてるぐらいだから会わないの無理じゃね、と思うさらにもう一人の僕。

「朝家の前で出待ちしてるぐらいだから、会わないのって難しくない？」

頭の中と現実では口調の強さが全然違う僕……。

「いえ、近づかせないなんて簡単ですよ。こう言えればいいんです——『キモイから近寄んな雑魚が』と」

……馬鹿なの？

初めて秋葉にこんなことを思った。

「っ！なんですかその目は。『馬鹿なの？』とでも言いたげですね。はっきり口に出したらどうですか？ほら、今思ったことを正直に口に出してください、兄さん」
鋭すぎる。滅茶苦茶凶星で肝が冷える。

「あ、秋葉はやっぱり凄いなあと思ったよ、ははは」

ごまかし。冷や汗がすごくてちゃんと笑えてるかは分からないが。

「……………これはこれで……………」

秋葉が消え去りそうなほど小さな声で零す。

これはこれで、何？これはこれでキモイとかだったら泣くよ？

「では、賛成ということでもいいのですね？」

「い、いやそれは……………」

やばい。俺はどっちにいい顔すればいいんだ。秋葉の機嫌を損ねたくないが、夏海に『キモイから近寄んな雑魚が』とか言ったらその日が俺の命日だろう。

……………それが狙いだったらどうしよう。自分の手を汚さず俺を始末する作

戦。秋葉、恐ろしい子っ!!

「はあ、まあ兄さんがヘタレなのは分かっています」

シンプルな悪口がいたい。

「なので、練習しましょう」

「練習？」

「はい、練習です。——では、私に言ってみてください」

「……………え　？」

秋葉が身を犠牲にしてまで作戦を成功させようとしてくる。そんなに僕を陥れたのか。

「さあ、どうぞ、遠慮せずに言ってください。本番だと思って、蔑みたっぷりに、さあ、さあ」

放たれる圧が一層重くなる。秋葉の本気度が伝わってきた。

言うしかないのか。

ここで言えば、この場は凌げる。が、その後はいよいよどうにもならない状況に嵌ってしまふ。夏海に言うともちろん殺され、言わなくても身を犠牲に準備してきた秋葉に殺される。

言うべきではない、と理解はしているのに、秋葉の圧に晒されていると徐々に抵抗する気概が萎んでいくのだ。

その時のことはその時考えよう理論が首をもたげた。

先のことよりも、この状況を脱することを優先する。典型的に駄目な思考だと思いつながら、遂に僕は口を開く。

そして、ドアが爆発した。

め、めっちゃビックリした。ドアがとんでもない力で外側から叩かれ、その体を折り曲げながら飛び出したのだ。

ひしゃげたドアが地面に倒れ、けたたましい音が鳴り響く。

その奥から、人影。

「おい、ナオキ先輩から離れろよ」

舞う破片が音を鳴らす中、その声は異様にはっきりと響いた。

人影の正体は、辺和夏海。いくらドアが老朽化していたからとはいえ、どれだけのパワーがあればこんな芸当ができるのか。

息を飲むほど怒気を纏わせながら、無惨な姿になったドアを踏みつけ、彼女は教室へ足を踏み入れる。

やばい、夏海が僕と秋葉を引き離そうとしている。そうになったら最期、守り（秋葉）を失った僕はボコボコのグチャグチャにされてしまう。頼むから僕を守ってく

ださい秋葉さん。

「……………あと少しだったのに」

秋葉が小さく呟いた。壁ドギャンツを解き、夏海と向かい合う彼女も、負けず劣らずの怒りを示している。

「仕方ありません、作戦変更です。ここでこの虫を消す。それで全て解決です」
やばい、虫とは僕のことか。頼むから僕を襲わないでください秋葉さん。

僕は今、怪物二人に狙われているということになる。絶体絶命だ。

「ナオキ先輩、すぐにこいつを片付けるんで、そしたらいっぱいお話しましょう」
「兄さん、すぐにこの虫を駆除するので、そうしたら先程の続きをしましょう」

お、おお、そうか、僕じゃないのか。

確かにこの子たちは互いに嫌いあっている。いつでも殺れる僕より、より脅威になるのを先に潰しておきたいということか。雑魚で助かった。

二人が睨み合う。ジリジリと距離が縮まって、やがて互いの間合いに入る。

動く、同時。拳と拳がどれだけ交錯しているのだろうか、僕には速すぎて何も見えない。

遂に喧嘩が始まってしまった。恐ろしい。
固唾を飲みながら、僕は教室を後にした。

文化祭準備で嵌められた夕方

好感度は、

- 10、一瞬離れるのも辛い(恋愛)
 - 9、ずっと想っちゃう(恋愛)
 - 8、大親友(友情)、大好き(恋愛)
 - 7、特に仲のいい友人(友情)、好き(恋愛)
 - 6、友人(友情)、気になってる(恋愛)
 - 5、普通
 - 4、ちょっと苦手
 - 3、嫌い
 - 2、大嫌い
 - 1、消したい(切実)
- という感じで行きます

秋葉VS夏海の対決が始まってすぐ、僕は職員室へ急いだ。

これから仲を深めていきたい二人だ。どちらも怪我して欲しくはない。

職員室に着いて、ノックする勇気を湧き上がらせること五分、ドアは僕が何もせずとも開かれた。

「ん？何してるんだ？」

職員室から筋肉隆々のゴツい男が出てきたのだ。

体育教師の五里^{ごり}先生。いつもは怖くて近づけないが、今の状況では理想的な人物と言える。

「あ、あの、喧嘩が起きてます」

「なにいい!?どこだ!?案内してくれ！」

「は、はい」

僕は再びあの空き教室へ走る。並走する五里先生は、じれったそうにしながらも、僕の速さに合わせてくれた。

「ここです！……て、あれ　？」

息を切らしながら教室に辿り着いたものの、そこは既に無人となっていた。

「おわあ!? 何だこのドア!? 壊れてんじゃねえか!!」

五里先生が破壊されたドアに目を剥く。ついで、僕の方に顔を向けた。

「キミ、喧嘩している奴の顔は見たか!?」

「い、いえ、焦っててあんまり……」

咄嗟に嘘を吐く。秋葉と夏海の喧嘩を目撃したのは僕だけの可能性がある。これで二人が呼び出されたら、確実に好感度が下がってしまう、そんな不安が僕に虚偽の申告をさせた。

「そうか、じゃあ覚えてる範囲でいいからその時の状況を教えてくれ」

——その後、質問をいくつかされる。適当に誤魔化しながら答えていく中で

現れた好感度は「6」だった。役に立たないからって酷くない？

暫くして五里先生は職員室に戻って行った。この後の処理を考えると申し訳なくなる。僕は嫌われて当然なのでは、とネガティブな思考にさえなってしまった。落ち込んだ気持ちのまま帰ろうと歩き出した時、それを見つけた。

「これは、針？」

地面で光を反射させているそれは、間違いなく針だった。

裁縫で使う一般的な針ではない。もっと、ダーツで使う針に近い形状をしていた。一気に血の気が引く。二人の喧嘩は、こんな物が飛び出すまでに発展していたのか。

急いで秋葉に電話をかける。

p——ガチャ。

「もしもし、兄さんですか？」

「……早くね　　？　一コールもなかったよ。」

「あ、うん、そうだけど。秋葉大丈夫？あの後怪我とかなかった？」

「私も、残念ながら辺和夏海も、これといった負傷はしていませんが……」

もしかして兄さん、私を心配しているのですか？」

「え？まあ、そうなるかな」

「……………すき」

??——??…？ん？何今の??すきって言った？すきって、好き？ん??…？

「すき、だらけですよ兄さん」

ち、違った。隙だらけだった。好きじゃなかった。めっちゃ恥ずかしい。妹に対して何を思ってるんだ僕は。キモすぎる。あと隙だらけて何？狙われているの僕。

「いざとなると、勇気が出ないものですね。兄妹の関係を壊してしまうのは、やはり怖いです」

兄妹の関係を壊すって、殺る気満々じゃん。勇気を出して何をやるの？僕を殺るの？

「秋葉、僕って何かから狙われてる？」

「……………分かりません」

少しの間からの濁した回答。明らかに凶星の反応じゃないか。

「今日の放課後、教室で待っていてください。迎えに行きます」

え、なんで？殺しにくるってこと？

「一緒に帰りましょう」

たとえ仲の良い兄妹だとしてもやらないような行為を唐突に平然に提案してきた。当然裏が無いわけが無いだろう。人目につかない場所に誘導して消されるのかもしれない。

「い、いや、遠慮しとくよ」

「駄目です。一緒に帰ります」

「そもそも僕、放課後文化祭の準備あるから。ほら、もうすぐでしょ、文化祭」

本日、僕のクラスで文化祭の準備があるのは本当。でも、今日の準備は任意参加だ。僕も元々行く気はなかった。が、秋葉と一緒に帰るといふ恐怖体験よりは、クラスの端っこでモジモジしてる方がマシという判断に至った。

「兄さんがいても迷惑をかけるだけでしょう」

ず、図星。

「でも一応僕も出るし」

「は？兄さんが？何にですか？」

「あれ、言ってなかったっけ。僕のクラス、"ホストバー"やるんだ」

「準備頑張ってください、では」

え、切られたんだけど。もしかして愛想つかされちゃった？好感度下がっちゃった？ええ、どうしよう。

困惑と焦りに襲われる。しかし、準備があると言ってしまった以上、早く帰ることはできない。

放課後は良い時間帯まで文化祭の準備を手伝うことにしよう。



そして放課後の教室。端っこで一人、小道具を作る。僕の他にも何名かのクラスメイトがいて、皆固まって喋りながら作業している。

日常の何気ない場面で劣等感を感じていると、教室のドアが開かれる音が聞こえた。そして現れたのは、

「あれ？春香じゃん、今日用事あるって言ってなかったっけ」

広角さんだった。

その姿にまず声を上げたのは、広角さんの友人である茶良さん。下の名前は分らない。

「あ、チャラちゃん。用事無くなったから来ちゃった」

その言葉に教室が沸き立つ。さすがの人気だ。

広角さんは教室を見渡すと、僕を見つけて動きを止めた。うわ、なんでいんのかと思われたりしてないだろうか。してそうだな。

「ん？ ああ、なるほど☆乙女だね、春香も」

「も、もう、やめてよチャラちゃん」

「じゃあ春香には、社会科室に置いてある衣装が人数分あるか確認してきてもらおっかな☆でも一人だと大変だろうから、二人とかで行った方がいいよ☆」

「——っ！ そ、そうかな？ そうだよね！ ありがとうチャラちゃん！」

茶良さんとの会話を終えた後、広角さんはこちらに向かってきた。

「スグクルくん！ 付いてきてくれないかな？」

なんかデジャブ。



「おおー、あったあった。ほら見てスグクルくん。ホストの衣装だよ」

広角さんがはしゃいでいる。体がはねるのに連動して大きなお胸が揺れる。うぐ、見るな、見るな僕の目。

ここは社会科室。例の如く僕と広角さん以外は誰もいない。鍵も掛けられた。僕の心臓はドキドキだ。無論、恐怖で。今日の昼と同じような状況に、警戒心は最大まで高まっている。

「えーと、1、2、3、…… 39、40。うん、ちゃんと人数分あるね」

「そ、そう、よかったね」

いつ何をしてくるか分からない。常に一定の距離を保つ。

「……………ねえ、スグクルくん」

その時、明らかに広角さんの雰囲気が変わった。

「は、はい」

思わず唾を飲む。殴られるのか、脅されるのか、何が来るんだ。

「この服、着てみない？」

「……………」

どんな思考でその考えに至ったの？

なまじ不穏なことをされるとばかり思っていたため、肩透かしをくらった気分になる。

「ほら、サイズとか来た時の感じとか確かめたいし。ね、いいでしょ？」

「え、まあ、それくらいなら」

「じゃあ、あっちの準備室の中で着替えて来てくれるかな？」

「分かったよ」

どうやらこの提案も文化祭準備の一環らしかった。しかし、ならんで急に纏うオーラが重くなったのだろう。いや、そもそもそのオーラとかも勘違いなのかも。言われた通り、併設されている準備室に入り着替えをする。

鏡がないので確認できないが、陰キャがホストの格好をしているって大分なグロ映像なのではなからうか。

い、いや、どんな人でも着たい服を着る権利はある筈だ。自信を持っていこう。もう一度身に纏うホスト服を整えてから準備室を出た。広角さんにこの身を晒す。

「——あうっ♡♡♡♡」

広角さんが、絶句していらっしやる。

え、そんなに酷い？へ、へこむ……。ええと、やっぱり着替え直した方がいかな。

「——写真」

「え？」

「写真、撮らせてくれる？」

写真？なんで？ああ、サンプルとしてクラスの皆に見せるのか。なるほど。

……それ、まずくない？

例えば、こんな状況を考えてみる。

『皆見て！スグクルくんの衣装姿！』

『うええ、きもちわるーい。なにこの勘違いやろー、ないわー』

地獄である。そうか、そうだったのか広角さん。ここへ僕を連れ込んだのは、全
てこのための布石。僕を笑いものにする為だったのか。酷い、酷すぎるよ広角さん
！

「ほら、そこに立って。そう、カメラ目線で」

抵抗しなきゃいけない。ああ、でもあの目だ。あの捕食者の目。怖すぎる。

「えへへ、じゃあ撮るね。いくよ？えへへ、はい、チーズ」

シャッター音。幾度となく聞いてきた筈のその音が、今は絶望の音にさえ感じら
れた。

「じゃあ次はツーショットね、ほら、もっとこっちに寄って？大丈夫、怖くないよ」
一枚で終わると思いきや、広角さんが体を詰めてくる。や、やばい。肩が、肩が
当たってる。お、落ち着け僕。ここでキョドったら益々思うつぼだ。後でクラスの
笑いの種にされてしまうんだ。

「ふあ♡♡んっ——ふうう♡♡♡スグクルくん♡♡ふふ、もっと、こっち♡そ
う、カメラに収まるように、ね♡♡ふうあ♡♡」

広角さんの様子がおかしい。体の拒否反応を必死で抑えようとしているのか。そ

んな決死の覚悟までして僕を笑いものにしたらしい。つ、辛い。あ、でもすつこ
い良い匂い。

……まんまと僕はキョドってしまった。そして、シャッターが切られる。終わった。明日から僕は笑いものだ。

$$\begin{array}{c} 14 \\ \downarrow \\ 15 \end{array}$$

広角さんが今の写真を確認していたところ、彼女の好感度が一つ上がった。

こ、これはあれか、完全に思い通りに動かされた僕の、遊び道具としての評価が高まったということか。どうしよう、凄い微妙な気持ち。

「わあ♡えへ♡♡スグクルくんと♡のツーツョットだ♡加工してない本物のツーツョット。やった♡わあ♡♡やった♡やった♡嬉しい♡♡わあ♡♡嬉しい♡♡嬉しい♡♡♡えへ♡♡♡」

「っ!?こ、広角さん?」

そこで僕は、異変に気づく。

スマホを見つめる広角さんは、頬を紅潮させ笑顔を浮かべている。が、その瞳からは、大粒の涙が止めどなく溢れ出ていたのだ。こ、怖い、怖すぎる。

僕を笑いものにできる喜びと、密着してしまった気持ち悪さを同時に感じているのだろう。でもそんな泣くほど気持ち悪がることある？僕も泣きたい。

こうして、恐怖と絶望に震えながら、文化祭の準備は過ぎていった。



——その日の夜。広角家。

私は自室で、今日撮ったスグクルくんの写真を見つめている。帰ってきてからずっとだ。一瞬も目を離さず見続けている。時計にも目をやっていないので、正確に何時間かは分からないが、窓から差し込んでくる光を感じなくなってから暫くしたので、最低でも三時間以上は経っているだろう。

ホスト姿で、カメラ目線のスグクルくん。

スグクルくんの写真は沢山持っているが、全て盗撮なため、カメラ目線というのは初めてだ。

じっと視線を合わせると、身体の芯から熱い想いが湧き上がってきて、四肢を駆

け回り、私の中をぐちゃぐちゃにしていくな。

「あぐっ♡♡うぐう♡♡♡スグクルくん♡♡だめだよ♡♡あっ♡♡うぐ♡♡♡」
 スグクルくんの瞳が、私のお腹の奥を鷲掴んで離してくれない。指先で弄ばれて
 いるように、ずっと疼きっぱなしだ。

「ふう——♡♡♡ふう——♡♡♡」

暴れ狂う愛情で、私は訳も分からず涙を流していた。愛の結露。スグクルくんの
 写真を見つめるだけで、熱い涙が零れ落ちてきた。

もう一枚の写真も見やる。

スグクルくんと私が、肩をくっつけた写真。

二人だけの世界。煩わしい虫のいない世界。

——渡さない。

私の中の愛情に、黒色が混ざる。

渡してなるものか。

スグクルくんの妹にも、辺和夏海にも、そしてもしかしたらもう一人、いるかも
 しれない誰かにも、決して譲りはしない。

スグクルくん成群がる羽虫は、全て駆除する。そう、二人だけの世界の為に。

”15
” ↓ ”16
”

高校生がホストバーってどんな文化祭やねんって書いた後に凄い思った

学校でも妹に怒られた昼（裏）

短いしヤンデレ描写が少ねえ。申し訳ねえ。

時は少し戻って、矢羽猪秋葉と辺和夏海の大乱闘の場面。

「ナオキ先輩、すぐにこいつを片付けるんで、そしたらいっぱいお話しましょっす」
「兄さん、すぐにこの虫を駆除するので、そうしたら先程の続きをしましょう」
もう少しで、兄さんが私を墮としてくれる筈だった。しかしそこに割り込んできたこの辺和夏海によって計画は狂わされた。

殺さねば。思考が熱くなる。心が目の前の雌犬を殺せと叫ぶ。

そしてそれは、あちら側も同じだろう。その怒りに満ち満ちた表情から容易に想

像できる。

睨み合いながら、ジリジリと距離を詰めていく。

辺和夏海の双眸から、嫌という程伝わってくる。——同類だ。この女は、私

と同類。兄さんに使われることを至高としている存在。

だからこそ、生かしておく訳にはいかない。

道具は、私一人で十分だ。

——間合い。踏み込む。

瞬間、目前に現れる拳。

予想より速い。が、対処できない訳では無い。首を捻って避け、同時にカウンターを返す。

辺和夏海の顔を真正面から捉える、その直前で、間に滑り込んできた右手に受け止められた。

辺和夏海はそのまま私の手を引く。体ごと前に持っていかれた。驚異的なパワーだ。しかしここで踏ん張ってはいけない。動きが止まる、今この状況でそれが意味

することは、則ち死だ。

私は引つ張られる力をそのまま利用して、辺和夏海に飛び込んだ。掴まっている腕を畳んで肘を繰り出す。狙うは首。

辺和夏海が仰け反る。体を逸らすことで肘打ちを回避したのだ。しかし体勢は崩れた。私も前のめって不安定ではあるが問題ない。このまま押し倒せる。

——そこで、悪寒。

「——っ」

咄嗟に掴まれていない方の腕で腹をガードする。何故腹を守ったか、何となくである。『何となく』ここに来るのが分かる。この化け物じみたと表現されるような天性の勘は、生まれた時からのものだが、今はそんな事を語っている暇はない。直ぐに、予想通り衝撃が走る。

「——ぐッ！」

いや、予想よりも衝撃は大きかった。

私の腕に刺さったのは膝蹴りだ。辺和夏海が仰け反ったのは、肘打ちを躲すのに加え、この膝の威力を上げる為でもあったらしい。しかしそれを加味しても、膝蹴

りがこの威力というは異常と言わざるを得ない。つまり辺和夏海にも天性の才が宿っているということだろう。

腕を扶る膝蹴りに、私の体が浮く。

「あれ？」

——しかし、膝蹴りが人を宙に浮かすという現象に驚いたのは、私ではなく
辺和夏海本人だった。

辺和夏海が、あまりの手応えの無さに一瞬動揺したのが分かる。

その隙に腕を振りほどこき、一度距離をとった。

腕へのダメージは、どうやら最小限に抑えられたようだ。

種を明かすと、接触の直前に力を抜いて衝撃を分散させた、それだけの事。まあ、言うは易く行うは難しだが。

——そこで、暫くの静寂が訪れる。

理由は単純。兄さんが移動したからだ。教室から出ていってしまうらしい。

兄さんがいなくなるのはとてもなく悲しいが、しかしこの教室にいたら怪我を

してしまう可能性もゼロではない。

私も、そして辺和夏海も、それが分かっているからこそ兄さんの退避を容認する。壊されたことで開放的になった入口から兄さんが出ていくのを確認した後、再び全ての意識を目の前の敵に集中させる。

兄さんという絶対に傷つけるべきではない存在がいなくなったことで、先程以上に辺和夏海が鮮明に見える。

——さて、これようやく、本気を出せます。

……まあ、それはあちらも同じでしょうが。



拳と拳の攻防。およそ高校生とは、いや、人間とすらも思えぬような闘争だった。矢羽猪直来が去る前よりも一撃一撃が遥かに速く、重く、目まぐるしい。

一体どれだけの時間が経ったのだろうか。引き伸ばされた思考の中で拳を交える彼女たちには、きつと見当もつかぬだろう。

両者、極限の闘いに肩で息を切っている。それでも尚、拳戟が止まることは無い。しかし、より呼吸が乱れているのは矢羽猪秋葉の方である。それもそのはず、辺和夏海の打撃は、ただの一撃でさえ致命の意味を帯びる。一秒の攻防でも、精神はどんどん磨り減ってしまう上、ガードしたとして、ダメージが確実に蓄積していく。対して、辺和夏海の表情も、余裕を持ったものではなかった。

ここまで拮抗した闘争は、彼女にとっても初の経験であったのだ。それほどに、矢羽猪秋葉という存在もまたイレギュラーだった。そしてもう一つ、彼女が余裕を持てない原因がある。放つ拳が、蹴りが、徐々にはあるが、矢羽猪秋葉に届かなくなっている。動きを見切ってきたのか、勘が冴え渡ってきたのかは分からないが、偶然でないことは確かだ。

ダメージが積もっていく矢羽猪秋葉、動きに対処され始めた辺和夏海、どちらにいても辿り着いた思考は同じだった。

——短期決戦、次で仕留める。

二つの闘志が迸る。選択した武器は、両者とも拳。脚の方が破壊力こそ高いが、精度を重視するなら断然拳だ。狙いは“首”。正確に撃ち抜いて、それで終わり。

次の数秒で、勝負が決まる。

——同時に踏み込んだ。絶死を掲げた両拳が唸る。時間が引き伸ばされ、二人の視界には辺りの光景がスローモーションに写った。

たったの一撃。絶死の一撃。自分は死なず、相手を殺す。

拳が、喉へ——

「——ッッ!!?」



校舎裏。この昼時には日陰になるジメッたいその場所には、一人の少女が壁に身を預けていた。

その少女の名は、矢羽猪秋葉。ほんの数分前まで校舎内で喧嘩を繰り広げていたその人である。

彼女は服の乱れを正しながら息を吐いた。

「危ないところでした。もう少しで、こんな無様な姿を兄さんに見られてしまうところでした」

疲労困憊、とまではいかなくとも、少なくとも疲労が秋葉の顔に滲んでいて、服も乱れている。

上を仰ぐ。その視線の先には、三階の窓の空いた部屋があった。秋葉の耳が、微かに音を捉える。

「おわあ!? 何だこのドア!? 壊れてんじゃねえか!!」

秋葉は飛び降りたのである。その窓から。矢羽猪直来に今の姿を見られたくない一心で。

「——しかし、厄介なことになりそうですね……」

壁に身を預け息を整えながら、彼女は先の喧嘩の結末を思う。

——一撃。両者魂を込めた一撃だった。私が選んだのはカウンター技。相手の打撃を受け流し、その反動を上乗せして打ち抜く算段だったのだが、

「——ッッ！！？」

接触の直前、辺和夏海は突然飛び退いたのだ。

そして、その眼前を黒い影が通過した。それは針だった。形状からして、おそらく麻酔針の類い。もし辺和夏海がそのまま私に向かってきていたら、確実に彼女の首元辺りに刺さっていただろう。

辺和夏海が、私から視線を離して針の飛んできた方向を睨んでいる。僅かに窓が開いていた。その隙間から辺和夏海を狙ったのだろう。じっとその隙間を睨めつける辺和夏海に、不意打ちを一瞬考えるが、そんなものが通用しないことは既に分かっている。何より、白昼に麻酔針なんてものを持ち出す存在に、私は心当たりがあった。

——辺和夏海のオーラが一変する。拳を交えている時より更に濃い殺気だ。そして次の瞬間、辺和夏海は窓を開け放ち、飛び降りた。優れた身のこなしで学校

の外へと駆けていく。

……教室に一人残った私も、近づいてくる足音が兄さんのものと勘づいた瞬間同様に飛び降りることとなった。

「——しかし解けませんね。あの時の辺和夏海の殺気、尋常ではありませんでした。彼女があれ程までになる理由……」

そこで、秋葉の頭に最悪の想定が過ぎる。

「まさか、兄さん？」

秋葉の知る限りでは、辺和夏海が心を動かすことと言ったら、専ら矢羽猪直来関連のことであった。

「ならやはり、あの麻酔針を撃ったのは……」

秋葉の双眸が細められる。その瞳は、倒すべき敵を見定めるようであった。

p ——— ガチャ。

「もしもし、兄さんですか？」



「……………もしかして兄さん、私を心配しているのですか？」

「え？まあ、そうなるかな」

「……………好き」

”17
“ ↓ ”18
“

文化祭で裏方してる昼

難産オブザイヤー

今回もヤンデレ要素が薄くなってしまった。次回はちゃんとヤンデレします。

ワイワイ、ガヤガヤ、騒がしい。その日、学校は平時と全く異なる熱気に包まれていた。大人から子供まで大勢の近隣住民を、この日の為に準備してきた学生たちもてなす。そう、遂に文化祭当日であった。



「あはは、加杉くんおもしろーい」

「ははは、萌笛ちゃんもね」

「えー、私はー？」

「勿論、君も最高だよ、萌部^{もぶ}日ちゃん」

「きゃー♡」

現在僕は、響きあう笑い声を聞きながら飲み物を用意していた。

予想以上の繁盛に、飲み物の回転率も速い。僕は裏で忙しく動き回る。

僕のクラスは、教室を布で仕切って、接待スペースである表と、厨房の裏に分けた形にしているのだ。

僕は当然裏、裏方である。広角さんの強い要望で、僕はお客さんから一切見えな
いここで飲み物を用意する係につかされた。一応ホスト姿ではあるものの、僕のこ
の格好は女子の何人かの好感度が一段階下がるほど不評だったのだから、人前に出
さないように必死なのだ。

それにしても広角さんのお願い（脅迫）は凄かった。絶対に客前に出ないでねと
何度も何度も言われた。

今も何処かで陰口を叩かれているかもしれない。そう考えると、言われてもいな
い悪口が聞こえて来る気がする。

「あはは☆スグっち芋っぽい☆」

メッチャ直接言われてた。驚くほど近くから直球の悪口が飛んできた。

コソコソ言うぐらいなら直接言えよ、という言葉葉を聞いたことがあるが、僕には当てはまらないみたいだ。是非陰口に留めて欲しかった。

声のした方を見ると、ウェーブのかかった金髪ロングを指先で弄りながら、茶良さんがニヤニヤとこちらを見ている。ちなみに僕のクラスのホストバーは、広角さんや茶良さんを含め女子も皆ホスト姿だ。茶良さんのホスト服、やけに様になるな。

茶良さんの好感度はいつも通り、*“7”*である。ほかのクラスメイトが基本 *“5”* 以下だから、低いのに高い気がする。

「前髪もうちょい上げたら印象変わるんじゃないかな☆」

茶良さんが跳ねるような足取りで距離を詰め、僕の前髪に触れた。

「——っっ!????」

「えーとお☆これをこーして」

何やら僕の髪をセットしてくれているようだ。近い、めっちゃ近い。仄かな香水

の香りを感じる。ひっちゃかめっちゃかに目線を泳がせるが、どうやっても茶良さんが視界の中に入り込んでしまう。

「んゝ、んゝ、んゝゝ……あっはは☆どゝやっても芋っばいや☆」

え？……そ、そんな面と向かって言うことくない　　？陰口でしてよ。

本当に泣くよ？

「あははゝ☆ごめんごめん。スグっちにもいゝところはあからさ、そんな顔しないでよゝ☆ほら、例えばゝ……んゝ、んゝと、んゝゝと……あつ

！

弱そうなところ☆」

あ、泣いちゃう。

「わゝ、わゝゝ！泣かないでスグっち！こらえてゝ！あつ、はいコレ！あげる！
飴ちゃん☆」

茶良さんはワタワタとポケットをまさぐり、その中から可愛く包装された飴を取り出すと、僕に手渡してきた。

下げてから上げられたせいか、こんな小さな球体でもなんだか嬉しく感じられてくる。そのおかげで、ギリギリのところでは涙は零れなかった。

「うんうん☆飴ちゃん舐めて元気だして☆」

「あ、ありがとうございます」

お礼が必要なのかは分からないが、一応言っておく。もう悪口言われたくない。僕の頭には茶良さんが恐怖の対象として認定されていた。

言われた通りに飴を口に入れる。

「……………」

……………緊張してて味がわからない。

僕レベルになると、人前での飲食というのはそれなりの難易度になってくるのだ。何かを考えているのか、茶良さんは飴を舐める僕を無言で見つめてきた。作法の監視でもしているのだろうか。飴舐める時の作法って何？

居心地が悪く、いつも通り視線を下に傾ける。しかしそこにはホスト服を押し上げる二つの山がある訳で。それを捉えてしまった途端、やけに申し訳ない気持ちになって再び目を背けた。依然無言の茶良さんを前に、口内で転がる飴と連動して僕の視線も四方八方に転がっている。

そんなことをしているとようやく、茶良さんが口を開いてくれた。

「スグっちさく、目え合わせる練習してみよっか☆」

「目を合わせる練習？」

「そっ☆スグっちの芋っぼさっていつもキョドってるのが原因だと思っただよね☆」

また地味に傷つくことを言われてしまう。

でも確かにその通りかもしれない。目を合わせられない陽キャというものは聞いたことがない。逆に目を合わせられる陰キャも聞いたことがない。つまり、目を合わせられるか合わせられないかが、陰と陽を分ける分水嶺なのではないだろうか。……しかし、僕の人見知りや幼少期から刷り込まれたもので、今更練習

してどうこうなるレベルではない気がする。——同時に夢想する。キラキラし

た、沢屋加杉くんのような自分。沢屋くんみたいになれば、皆からの好感度爆上がりも夢ではない。

「や、やや、やってみたいです」

返答が既にキョドってしまった。たぶんめっちゃ必死でキモイとか思われてる。でも許して欲しい。僕にとって人をお願いをするというのは、それだけで一大イベ

ントなのだ。しかもそれが陽キャにしてくださいなどというお願いなら尚更。正直とても恥ずかしい。

「おっけ☆じゃ、目え離さないでね☆」

俺は意を決して茶良さんの双眸に視線を定めた。視線がぶつかった瞬間反射的に逸らしてしまいそうになるが、手を固く握って何とか耐える。

変わりたいという想い、茶良さんの期待に応えて好感度を上げたいという希望、そして何より失敗したらまた罵倒されるという恐怖、これらが合わさり僕は自分の意思で茶良さんを見続けた。

この“自分の意思で”ということが重要である。今まで何度か長時間目を合わせたまま制止するという場面はあった。しかしそれはどれも、逸らしたくても逸らせない状況ゆえだ。

成長している。僕は今成長している！

「えいっ☆」

内心を自身への喜びで満たしていたその時だった。明るく、やけに楽しそうな掛け声とともに、茶良さんの双眸が急接近してきたのだ。

「——っ！！？」

反射で視線を弾かなかったのは完全に偶然だった。意思が強かったとかではない。というかその瞬間、僕の思考は吹き飛んでいた。

「あっはは☆スグっちの目え、近くで見ちゃうよ☆……じく☆」

ともすれば互いの体温すら伝播しそうな至近距離。そんな状況が唐突に襲ってきたものだから、僕の脳内は真っ白に染まっている。

その間、茶良さんが僕の瞳をじっと覗いてきた。

「……………あはっ♡」

“7” ↓ “10”

茶良さんから漏れた小さな笑い。そして上がった数字。僕の脳が、再稼働を始める。

しかしそれは、茶良さんが更に一步詰め寄ってきたことで、またもや混乱に引き戻された。茶良さんと体が触れる。その顔は、広角さんが時折見せる猛獣の笑みに

よく似ていた。

「……………と、危ない危ない☆ついスグっちのこと襲いたくなっ
ちゃったよ☆」

“10” ↓ “8”

茶良さんがようやく身を引いた。と同時に数字も下がる。

顔には既にいつもの明るさが戻っており、先の猛獣は見えない。しかし細められた瞳の奥に、微かに不穏な澱みが残っている。よく分からないが何となくそう感じた。

「うーん、スグっちとこれ以上一緒にいると我慢できないかもだし、あーしは表に戻っとくよ☆」

僕の思考がやっと戻ってきはじめた時、茶良さんは仕切り布の向こう側へと行ってしまった。

……………ぽつんと残された僕。ようやく明瞭になった頭で、今の今までの自身の行動を一つ一つ振り返る機会がやって来た。

——最初のうちは自分の意思で目を合わせていた。しかし茶良さんの急接近以降はもはや僕の意思ではない。でも茶良さんは僕が頑張っていると勘違いしたのだろう。その証拠に好感度が“7”から“10”へと上がっていた。……

問題は、その後だ。好感度が下がって、茶良さんから襲いたくなつたなどと言われたこと、これが問題だ。つまり僕は、間近で見ると殴りたくなるほどイラつく顔を持っているということ。

す、救いがない。

悲しすぎる事実に打ちひしがれる。

どうしようもなくなつた僕は、やがて現実逃避を裏方作業に求めることにした。横に広がるテーブルを見る。大きなペットボトルジュースが並べられたテーブル。僕の仕事はオーダー通りにコップに注いでいくだけだ。

さあ、切り替えて仕事を再開しよう、辛い現実なんて忘れてしまおう、と空元気で意気込んだところで、別のものに目が止まった。スマホだ。テーブルの上に置かれた、僕のスマホ。そういえばポケットから取り出したまま放置していたのを忘れ

ていた。

スマホを手取る。次いで画面を見ると――、

秋葉

未読284件、不在着信112件

僕は死を覚悟した。



「はふ〜☆危ないところだったあ〜☆春香のこと裏切りたくないし我慢できて良かったよ〜☆あーしえらいっ☆……いやまあ、あーしがこんな事になって

んのも春香のせいなんだけど。はあーあ、春香ってばさっさとスグっち襲っちゃえばいいのに。じゃないとお〜――

あーしそろそろ、我慢できないかも☆」

矢羽猪直来はめをあわすを覚えた

好感度数値が見えるようになった。よく話す彼女達は“13、だった。泣きたい。

著者 鹿里マリョウ

発行日 2022 年 7 月 13 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://svosetu.org/novel/246702/>